第３章　京都大学病院構内ＡＧ20・ＡＦ20区の発掘調査

千葉　　豊

１　調査の概要

調査地点は，吉田山西南麓，京都大学医学部附属病院構内の東南部にあたる。ここに中央診療棟の取り壊し工事等が計画されたため，隣接地点における従来の調査結果および既存建物の位置などを勘案して，２箇所の調査区（ＡＧ20区東調査区・西調査区）を設定して発掘調査を実施した。さらに調査期間中に，本調査区の南に隣接する地点（ＡＦ20区）に，ＭＲＩ－ＣＴ装置棟の新営が計画されたため，ＡＧ20区の調査と併行して発掘調査をおこなった（図版１-239・240，図42）。現地調査は1995年12月１日に開始し，1996年５月31日に終了した。調査面積は，総計2540㎡である。

本調査区一帯は，現在の鴨川東縁部にあたり，先史時代には高野川系旧流路，白川系旧流路が流入する低地部を形成していた。本格的な開発は古代末以降で，六勝寺を中心に展開した白川街区の北辺にあたり，康和５（1103）年に僧増誉が創始した聖護院とその鎮守社熊野社の所領に含まれていた。室町時代には聖護院村が成立し，近世後半には蔬菜類を主産品とする都市近郊農村として栄えた場所である。周辺の既往の調査では，近世の池や幕末の蓮月焼を多量に出土した土坑（141地点），縄文時代の旧流路，古代の土坑，中世の井戸・溝，近世の土取穴（154・155・191地点）などがみつかっており，今回の調査でもこうした時代の資料が得られるものと予想された。

発掘調査の結果，縄文・弥生時代の旧流路，中世の井戸・土坑，近世の池・溝・旧流路などを検出した。出土遺物は，縄文時代から江戸時代に及び整理箱で214箱を数える。これらは，この地における土地利用の変遷を明らかにする基礎資料として活用できよう。とりわけ近世の溝から多量に出土した17世紀の土器・陶磁器は，京都大学構内遺跡では従来ほとんどみられなかった資料として重要である。また今回の調査でも多量に出土した蓮月焼は，その実態を知るうえで，貴重な資料となるであろう。

なお現地調査は，千葉豊と吉田広が担当し，磯谷敦子・柴垣理恵子・下坂澄子・曽根茂・松村知也・下垣仁志・稲増崇・吉田崇・飛知和東子・尾上忍が測量などの作業にあたった。また出土資料の整理は千葉が担当し，磯谷・下坂・曽根・松村・下垣・稲増・飛知和・尾上・木村圭祐・梅川須恵が実測・復元などの作業をおこなった。

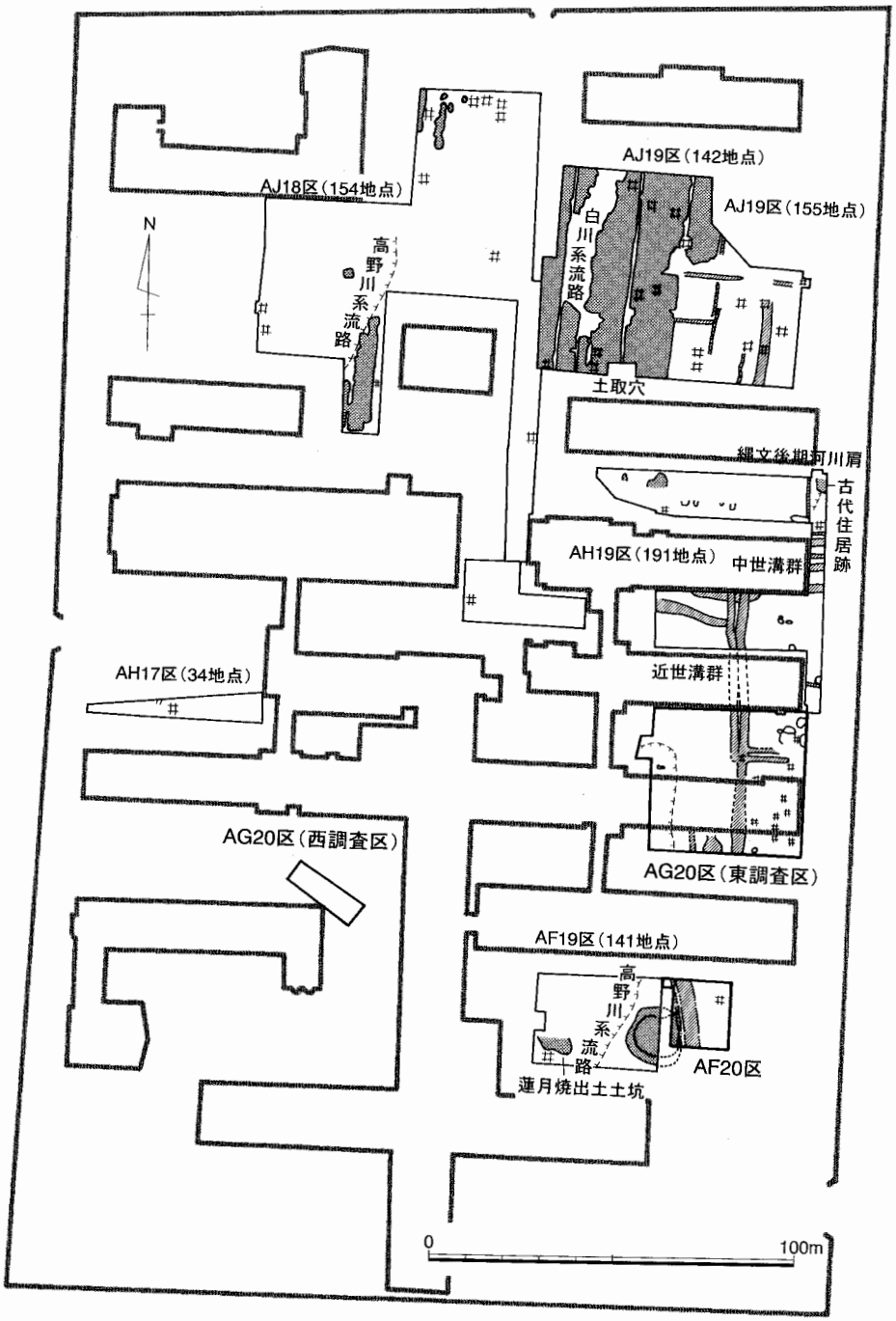


図42　本調査区の位置と病院東構内の遺跡　縮尺1/2000

2　ＡＧ20区の遺構と遺物

ＡＧ20区の調査では，東調査区と西調査区の２箇所の調査区を設定して調査を進めた。西調査区は近現代の管路により，遺跡のほとんどが破壊されており，中世の遺物包含層をごく一部検出したにとどまった。ここでは，おもに東調査区の成果について詳述する。

(1) 層　　位（図43）

現地表の標高は，50.0m前後で平坦である。基本的な堆積は，上から順に表土（第１層），灰褐色土（第２層），茶褐色砂質土（第３層），黄褐色粗砂（第４層），黄灰色粘土（第５層），黒色土（第６層），淡褐色砂質土（第７層），黄灰色シルト（第８層），赤褐色砂礫（第９層）である。

灰褐色土は近世の遺物を包含するが，近代以降の大規模な削平により，ほとんど残存していなかった。茶褐色砂質土は中世の遺物包含層で，その上面で，近世の土取穴を検出した。黄褐色粗砂および黄灰色粘土は，無遺物層であるため，堆積時期の特定は困難であるが，上下の堆積層の時期から弥生以降古代までと判断できる。黄灰色粘土は，Ｙ＝2000より東でのみ確認された。

黒色土は，東へゆくに従って粘性が強くなる。少量ながら，縄文晩期の土器が出土した。調査区西半では，この黒色土上面で弥生時代の自然流路ＳＲ２～６を検出した。いずれも北から南へ流れた白川系流路である。黄灰色シルトは，調査区一帯に堆積しており，中世・近世の土取りの対象となった土層である。井戸側面の観察により，1.6m前後の厚みをもち，その下層には赤褐色砂礫が堆積していることを確認している。調査区西辺では，この黄灰色シルトを切り込んで形成された自然流路ＳＲ７を検出した。淡褐色砂質土は，このＳＲ７の肩部から黄灰色シルトを覆って堆積しており，ＳＲ７の溢流堆積物と理解できる。ＳＲ７および淡褐色砂質土からは，縄文後期の遺物が出土した。

一方，西調査区の基本的な堆積は，上から順に表土，灰褐色土，茶褐色砂質土，赤褐色砂礫であった。東調査区で認められた黄褐色粗砂以下黄灰色シルトまでの堆積土は存在せず，赤褐色砂礫が茶褐色砂質土の下に堆積していた。

(2) 遺　　構（図版21～22，図44～47）

旧病棟基礎などによって遺跡は大きく破壊されていたが，流路・溝・井戸・土取穴など，土地利用の変遷にともなって異なる性格の遺構を検出した。

先史時代の遺構　縄文・弥生時代の遺構は自然流路のみで，人為的に形成されたもの

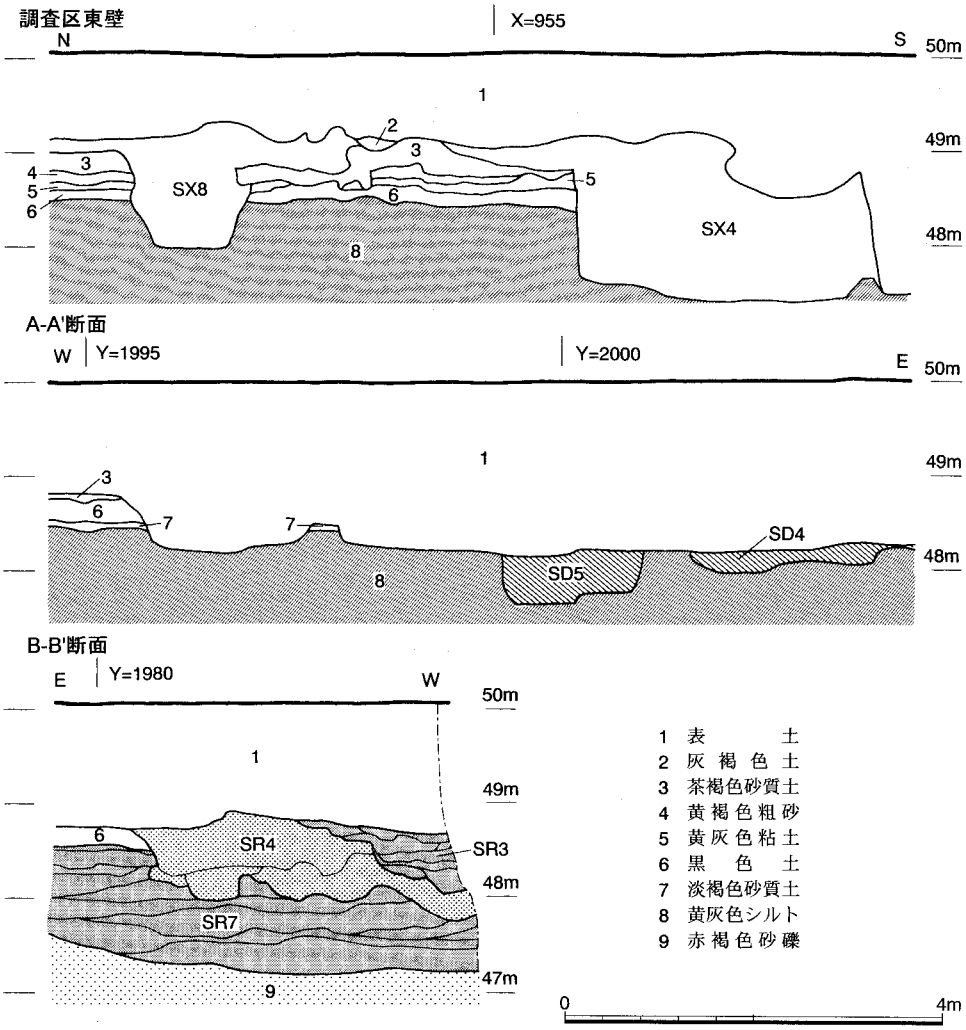


図43　東調査区の層位　縮尺1/80

はない。縄文時代の流路ＳＲ７は調査区西辺でみつかり，流路の東端は検出できたが，西端は調査区外である。縄文後期の遺物を多く含み，またこの溢流である淡褐色砂質土からは保存状態のよい縄文土器が出土していることから，141地点でも想定されたように，縄文人の活動が調査区一帯にまで及んでいたことを物語る〔千葉91〕。

弥生時代の流路のうち，ＳＲ３とＳＲ４は調査区西端で検出された。ＳＲ４はＳＲ３に西端を切られており，いずれも一部を検出したにとどまった。ＳＲ４は埋土に前期の土器，ＳＲ３は中期の土器を含んでおり，それぞれその時期に埋積が進んだものと判断しうる。

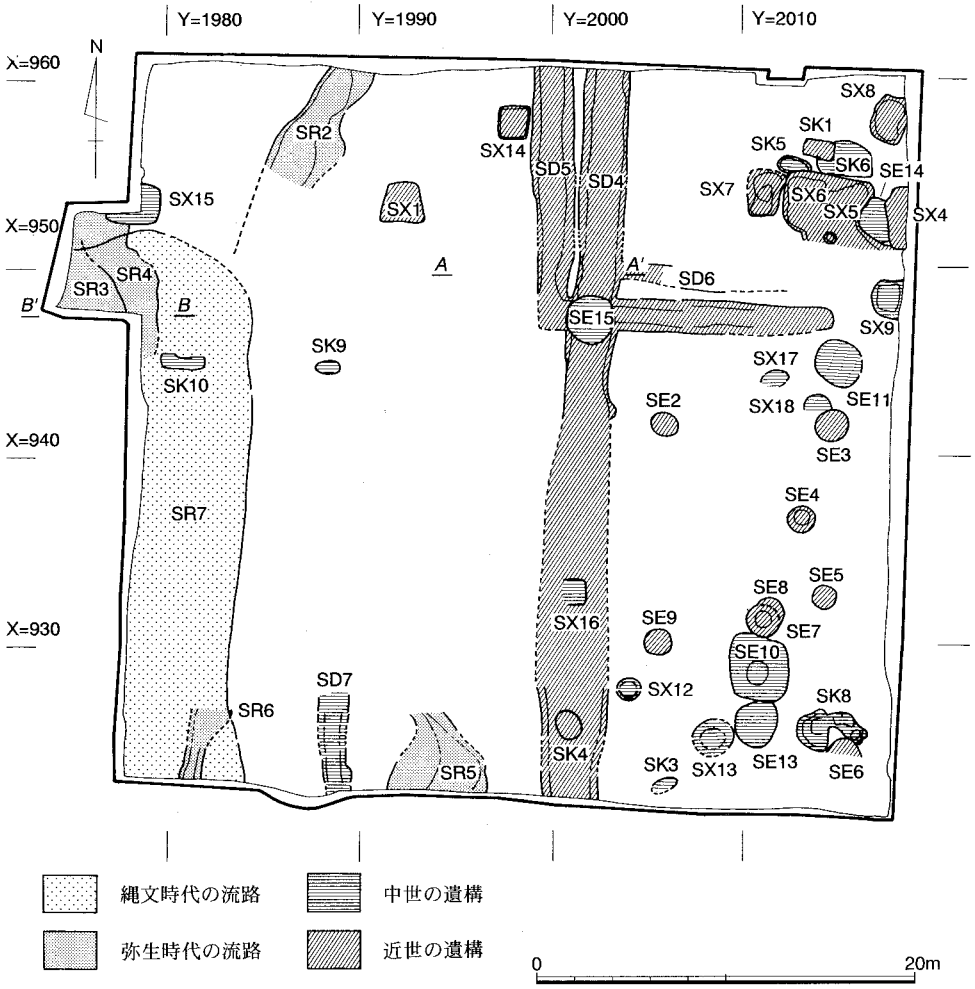


図44　東調査区検出の遺構　縮尺1/400

ＳＲ２は調査区西辺の北端，ＳＲ５とＳＲ６は南端で検出した流路で，弥生後期～終末の土器を含んでいることから，一連のものである可能性が高い。これらの流路から出土した弥生土器はほとんど摩滅していないことから，医学部・病院構内に想定されている弥生遺跡から流れ込んだものと理解できる〔伊藤95〕。

中世の遺構　中世の遺構は，12世紀後葉～13世紀前葉を中心とする中世前半と，14世紀後半～15世紀の中世後半の２時期に大別できる。

中世前半の遺構には，井戸・溝・土坑などがある。ＳＥ10・13・14，ＳＸ９・15・16～18がこの時期の井戸である。ＳＥ10・13は石組の井戸側をもち，ＳＥ10は石組の下に，さ

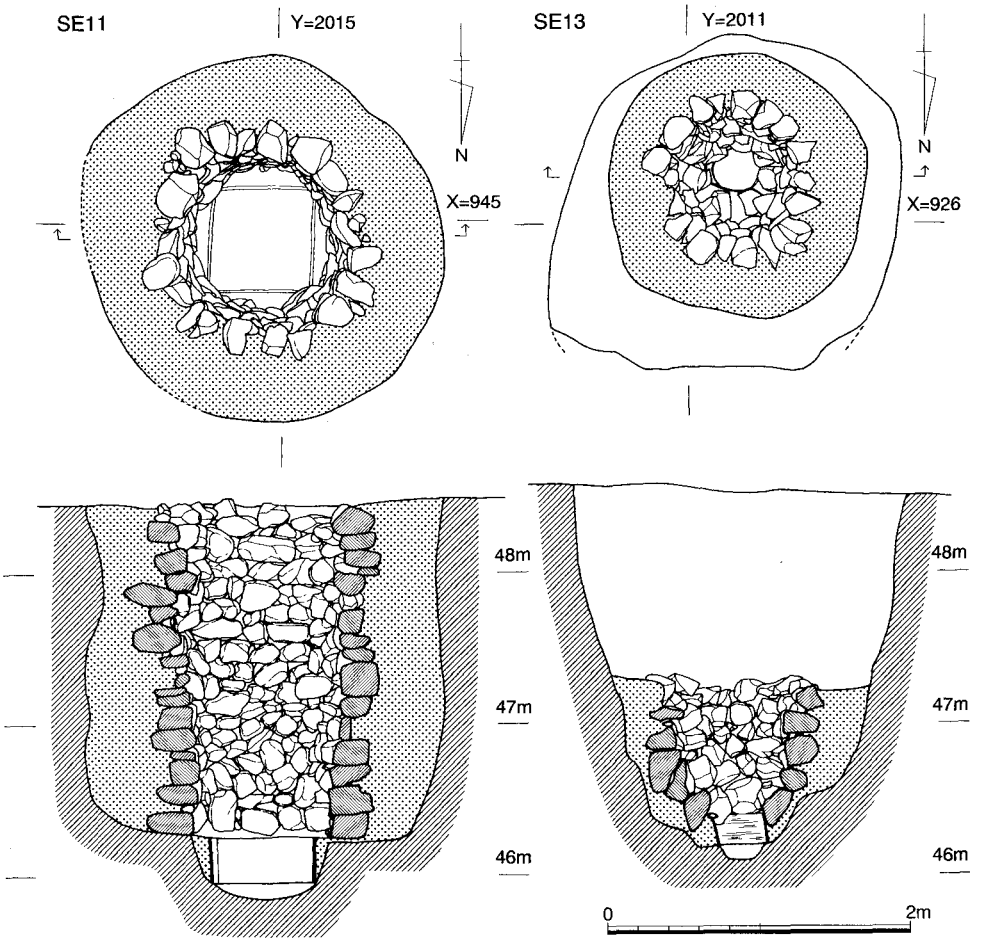


図45　井戸ＳＥ11・ＳＥ13　縮尺1/50

らに横板で木枠を構成している。ともに水溜に曲物を設置していた。ＳＥ14は，上部を近世の土取穴で大きく破壊されていた井戸で，横板による長方形木枠と水溜の曲物が残存していた。ＳＸ９・15は方形の掘形をもつ。木枠・石組などの痕跡がまったくみられなかったため，発掘当初，土取穴の可能性も考えたが，平面，断面の形態と砂礫層まで掘り込んでいることから，素掘ないしは木枠を用いた井戸と判断する。ＳＸ16～18は近代以降に大半を破壊されており，下底面がかろうじて残存していた。砂礫層まで掘り込んでいるため，井戸の可能性が高い。これらの井戸底の標高は，45.7～46.4mである。

調査区南西部で検出した溝ＳＤ７は断面逆台形で，幅1.5m深さ60cm前後をはかる。この時期の遺構は調査区東半に多く，ＳＤ７が土地利用の区画をなしていた可能性がある。

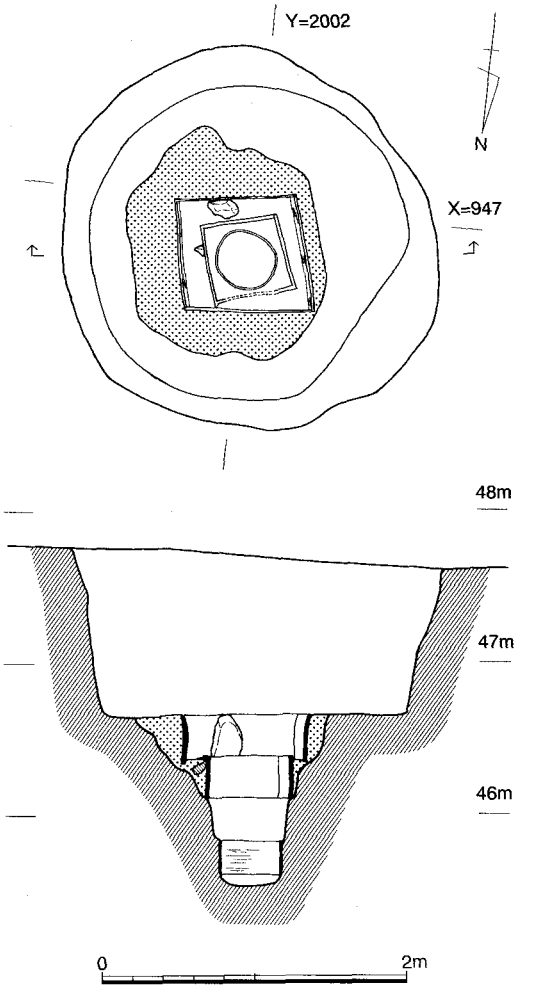


図46　井戸ＳＥ15　縮尺1/50

出土遺物が少ないため，時期の特定は困難であるが，13世紀代には埋積している。

中世前半の土坑はＳＸ12とＳＫ９で，ＳＸ12は平面円形を呈し，直径1.2m深さ20cmをはかる。小児頭大の礫が中央に集められていた。ＳＫ９は長さ1.3m幅75cm深さ40cmをはかる隅丸長方形の土坑。

中世後半の遺構には，井戸・土坑などがある。中世前半同様，遺構は東半に多い。

ＳＥ11・15がこの時期の井戸。ＳＥ11は石組の井戸側をもち，水溜に方形木枠を設置する。井戸底の標高，45.8m。ＳＥ15は井戸側上半の構造は不明で，下半は方形木枠２段で構成される。木枠の残りは非常に悪かったが，木製の釘を用いて固定しているのが観察さ

れた。水溜には曲物を設置する。井戸底の標高，45.5m。

中世後半の土坑には，ＳＫ３・５・６・８・10，ＳＸ13がある。ＳＫ３・10は，多量の土師器・瓦器類が出土した土器溜。ＳＫ10は後世に上部を削平されており，下部のみ検出した。ＳＫ５は長さ1.8m幅90cm深さ20cmをはかる隅丸長方形の土坑で，埋土から完形の土師器皿が出土した。墓ないしは祭祀に関わる遺構であろう。ＳＫ６・ＳＸ13は集石をともなう土坑。ＳＫ６は長さ３m幅1.8m深さ30cm，ＳＸ13は直径2.1m深さ30cmをはかり，拳大から人頭大の礫が集中していた。

近世の遺構　井戸・溝・土取穴などがある。ＳＥ２～９がこの時期の井戸であり，溝ＳＤ４より東側でかつ南半に集中する。井戸側は石組で構築しているものが多く，さらに石組の下にＳＥ２・６は桶，ＳＥ７は横板木枠を設置している。ＳＥ３は最下部に丸太を井桁に組んだ後，石を組み上げており，裏込めには拳大を中心とした礫を充填している。ＳＥ５は井戸瓦を用いて井戸側を構築しており，その下部に桶を設置している。ＳＥ９は井戸側上半の構造は不明で，下半は桶を上下２段に組んだ痕跡のみが確認できた。ＳＥ７に切られるＳＥ８の井戸側は不明。ＳＥ７～９の水溜には，曲物が設置してあった。これらの井戸の底の標高は，45.4～46.0mのあいだに分布する。

近世に属する溝は，ＳＤ４～６である。ＳＤ４は調査区ほぼ中央を南北にはしる溝で北端，南端ともに調査区外へと続く。断面逆台形で，幅2.4m前後，深さは30～60cmをはかる。ＳＤ５はＳＤ４の西側を平行して南北にはしり，Ｘ＝948付近で東に直角に折れ曲がり，Ｙ＝2015付近で立ち上がる。断面逆台形で，幅1.8～2.2m，深さ60cm前後をはかる。ＳＤ６は，Ｘ＝950付近でＳＤ４の東側肩から東へ伸びる。後世の削平・攪乱により，形状・規模は明確ではないが，Ｙ＝2017付近で立ち上がるようである。これらの溝の下底部には，粘質土が堆積しており，滞水する状況があったことを示している。出土遺物からみてＳＤ５の埋没が遅れるようであるが，明瞭な切り合い関係は観察されなかった。これらの溝は，17世紀から18世紀にかけて埋積が進んでいったと理解する。

土取穴は調査区北東で集中して発見され（ＳＸ４～８），西辺にもみられた（ＳＸ１）。いずれも平面が不定形で黄灰色シルトを掘りきったところで掘削を止めている。

ＳＫ１は長さ1.6m幅90cm深さ30cmをはかる長方形の土坑で，拳大から人頭大の礫で充填されていた。土師器の小片が少量出土したのみで時期の特定は困難であるが，ＳＫ６を切って構築されていることから，近世に下る遺構と判断した。ＳＫ４は直径1.5m前後の不整円形の土坑で，幕末の蓮月焼を含む陶磁器が出土した。

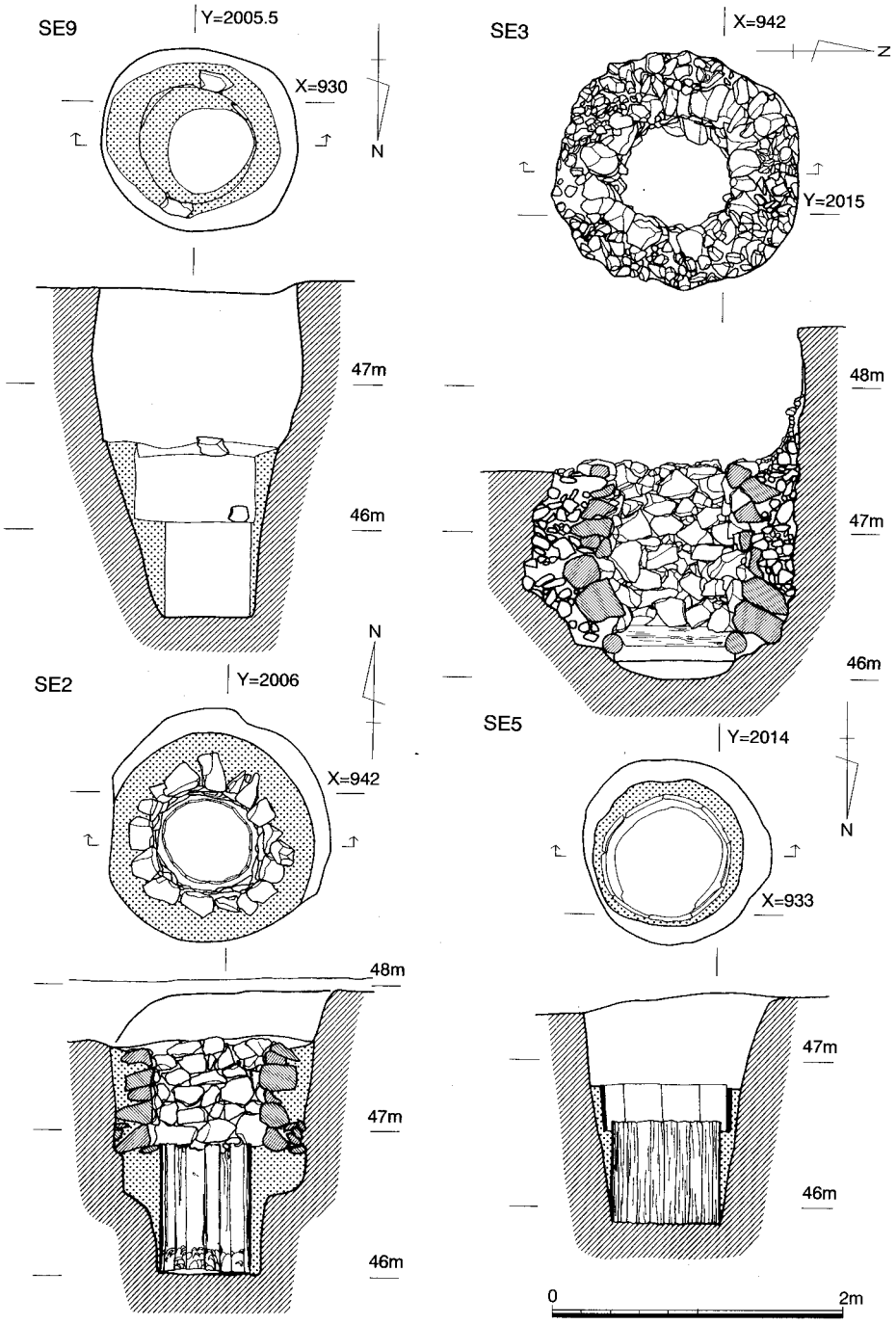


図47　井戸ＳＥ９・ＳＥ３・ＳＥ２・ＳＥ５　縮尺1/50

(3) 出土遺物（図版24～34，図48～66，表６）

縄文時代の遺物　Ⅱ１～Ⅱ８は，淡褐色砂質土出土の縄文土器。Ⅱ１・Ⅱ５は有文深鉢。Ⅱ１は口頸部が外反し，口縁端部を短く内側へ折り曲げる。口縁端部直下に刻目隆帯を横走させ，８字状浮文を貼り付ける。口頸部には沈線で三角文と逆三角文を描き，２段左撚縄文を充填する。内外面とも磨いて仕上げる。口径25cm，器高16.2cm。Ⅱ５は縁帯文土器の口縁部で，く字形に屈曲する。沈線で長方形区画文を描いた後，２段左撚縄文を施文する。Ⅱ２・Ⅱ６は縄文地深鉢。Ⅱ２は前面が肥厚する口縁部と胴部に２段左撚縄文を施文する。Ⅱ６は肥厚する口縁内面に２段左撚縄文を施し，外面は二枚貝条痕で仕上げる。Ⅱ３は深鉢の胴部で，櫛状施文具による条線文を斜格子に施す。Ⅱ４はボウル形の有文浅鉢。文様意匠は上下２段で構成される。上段は三角文と逆三角文からなり，逆三角文の底辺中央にＪ字文がとりつくとみられる。下段は長方形文とＪ字渦巻文が描かれる。２段左撚縄文を充填し，内外面とも磨いて仕上げる。口径30.4cm，器高12.7cm。Ⅱ７は無文深鉢の口縁部。口縁外側端部が丸く肥厚する。Ⅱ８は底部資料。底部直上で垂直気味に立ち上がった後，外傾する。

Ⅱ９～Ⅱ39はＳＲ７出土の縄文土器。Ⅱ９～Ⅱ13は有文深鉢の口縁部。Ⅱ９は口縁端部を内外に肥厚させ，上面に沈線を１条巡らせる。Ⅱ10・Ⅱ11は前面がわずかに肥厚し，弧線文・同心円文を施す。Ⅱ12は口縁内面直下に刺突をともなう横走沈線をめぐらし，口縁

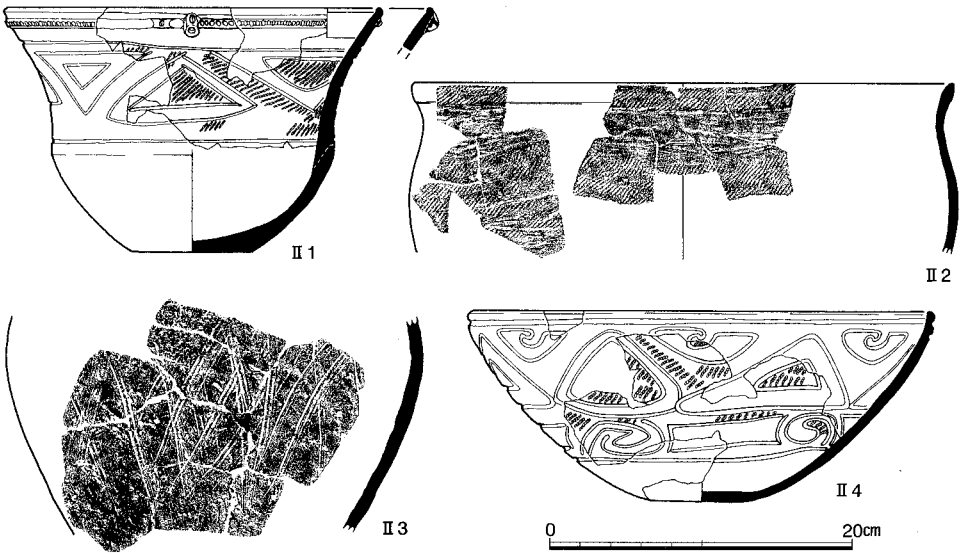


図48　淡褐色砂質土出土土器（Ⅱ１～Ⅱ４縄文後期）　縮尺1/5

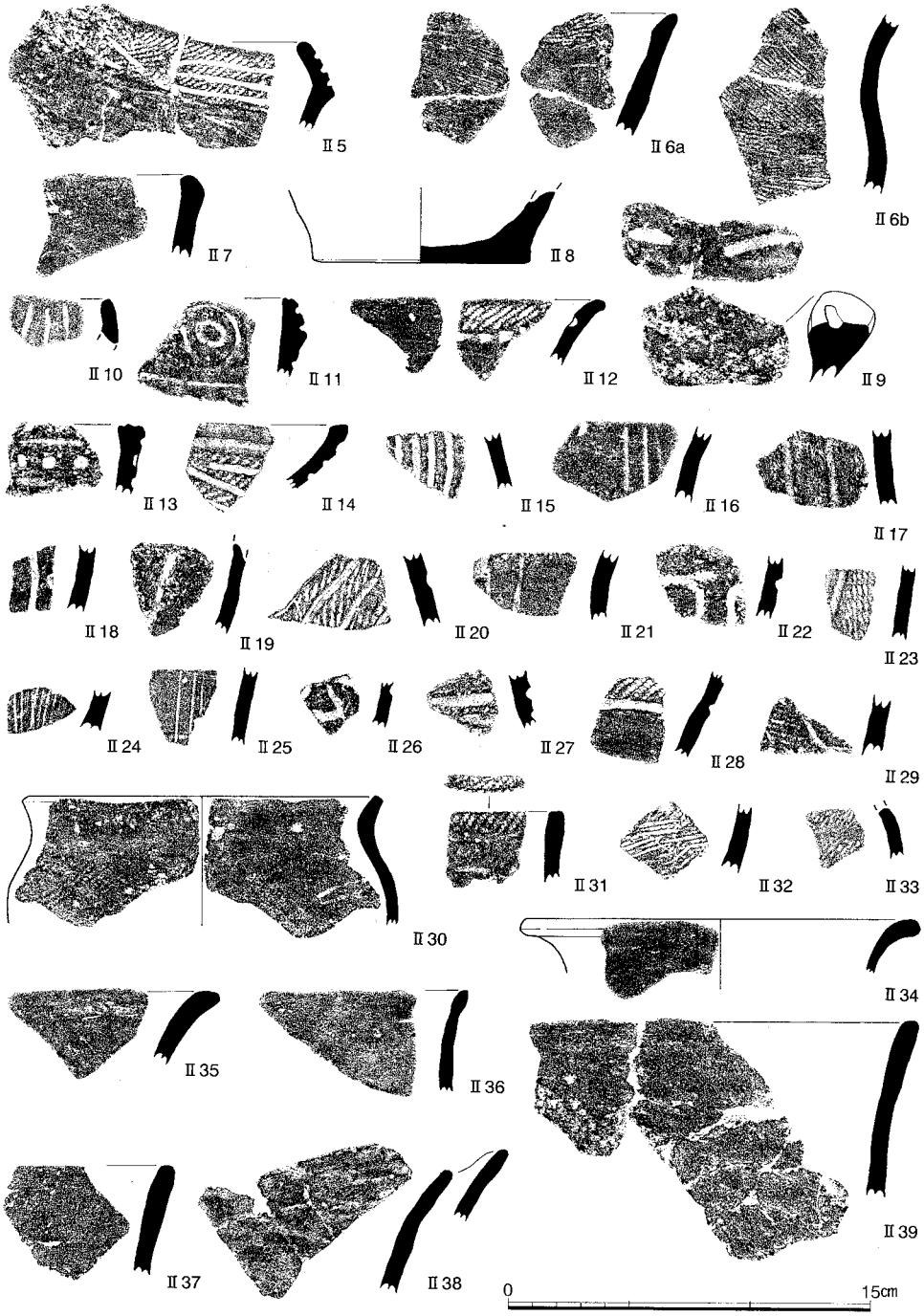


図49　淡褐色砂質土出土土器（Ⅱ５～Ⅱ８縄文後期），ＳＲ７出土土器（Ⅱ９～Ⅱ39縄文後期）
縮尺1/3

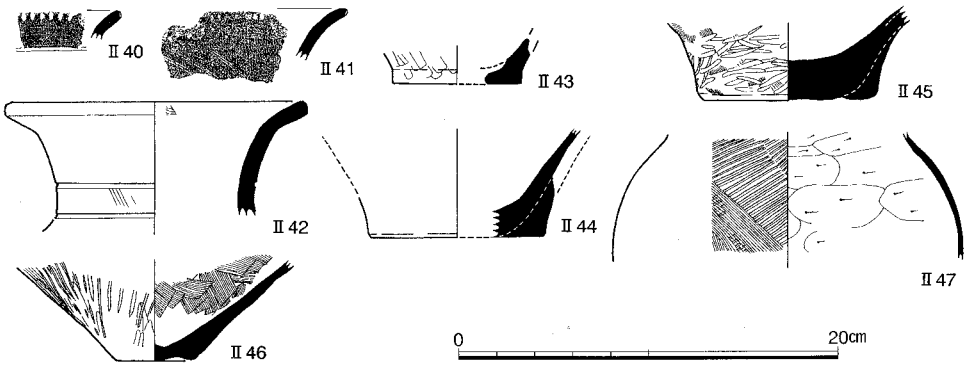


図50　ＳＲ４出土土器（Ⅱ40～Ⅱ45弥生前期），ＳＲ５出土土器（Ⅱ46弥生後期・Ⅱ47庄内式）

端部との間に２段左撚縄文を充填する。Ⅱ13は口縁部前面に沈線を２条横走させ，その間に円形刺突列を配する。Ⅱ14はボウル形の有文浅鉢。三角文を基調とする文様意匠に２段左撚縄文を充填している。Ⅱ15～Ⅱ29は有文深鉢の胴部資料。多条沈線文あるいは条線文を用いた縦位の文様が多いが，帯縄文による横位の文様も認められる。縄文を用いている資料はⅡ20・Ⅱ23・Ⅱ28・Ⅱ29で，原体はいずれも２段左撚である。Ⅱ30～Ⅱ34は縄文地の深鉢ないしは鉢。Ⅱ30は口径14.4cmをはかる鉢で，胴部に２段左撚縄文を施文する。Ⅱ31は口縁外面に加えて口縁上面にも２段左撚縄文を施す。Ⅱ32・Ⅱ33は胴部資料で，縄文原体は，Ⅱ32が１段左撚，Ⅱ33が２段左撚である。Ⅱ35～Ⅱ39は無文深鉢の口縁部。

淡褐色砂質土およびＳＲ７から出土した縄文土器はいずれも縄文後期前葉に属し，Ⅱ９が縁帯文成立期であるほかは北白川上層式２期に比定できるものが主体を占める。

弥生時代の遺物　Ⅱ40～Ⅱ45はＳＲ４出土の弥生土器。Ⅱ40・Ⅱ41は甕。口縁部が外反し，口縁端部に刻みを施す。Ⅱ40は頸部に巡らした箆描沈線文の一部が残存する。Ⅱ42は壺。口縁部が外反し，頸部に２条以上の箆描沈線文を施す。外面は縦方向，内面は横方向の刷毛目で整形した後，磨いて仕上げる。Ⅱ43～Ⅱ45は底部資料。これらは，弥生前期新段階を中心とするものであろう。

Ⅱ46・Ⅱ47はＳＲ５出土土器。Ⅱ46は甕の底部。外面は叩きを施すが，胴部下端までは及ばない。内面は刷毛目調整で仕上げる。輪台技法で成形されており，底部外面が凹む。Ⅱ47は外面叩き成形の後，一部に刷毛目，内面は削りで仕上げている。器厚が３㎜と薄い。暗褐色で角閃石を多量に含み，生駒西麓産の胎土の特徴を示す，庄内式の甕である。これらは弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけてのものである。

中世の遺物　Ⅱ48～Ⅱ96はＳＥ14出土遺物。Ⅱ48～Ⅱ73は土師器皿。Ⅱ48～Ⅱ59は皿

ＡⅠ，Ⅱ60～Ⅱ73は皿ＡⅡ。Ⅱ48は２段撫で面取り手法Ｃ$_3$類，Ⅱ49・Ⅱ50・Ⅱ60～Ⅱ63は１段撫で素縁手法Ｄ$_3$類，Ⅱ51・Ⅱ52・Ⅱ64～Ⅱ68は１段撫で面取り手法Ｄ$_4$類，Ⅱ53～Ⅱ58・Ⅱ69～Ⅱ73は１段撫で面取り手法Ｄ$_5$類，Ⅱ59は１段撫で面取り手法Ｄ$_6$類である。Ⅱ65は口縁端部に煤が厚く付着し，灯明皿として使用されている。皿ＡⅠは口径14～15cm，皿ＡⅡは口径９cmにピークがあり，口縁形態は，皿ＡⅠではＤ$_5$類が多く，Ｄ$_4$類，Ｄ$_3$類が続き，皿ＡⅡではＤ$_3$類が過半数を占め，Ｄ$_4$類，Ｄ$_5$類が一定量を占める（表６ p.102）。Ⅱ74・Ⅱ75は土師器受皿。口径は7.6cmをはかる。

Ⅱ76～Ⅱ79は楠葉型瓦器椀。Ⅱ76・Ⅱ77は口縁内面に浅い沈線を１条めぐらす。口縁部の残存するⅡ76～Ⅱ78は，いずれも内面にのみ篦磨きを施している。Ⅱ79は見込みにジグザグになると思われる暗文を施す。Ⅱ80は口径8.0cmをはかる瓦器の小型皿。内面にのみ粗い篦磨きを施す。これらは，橋本久和の編年によるⅢ－１期にあたるものであろう〔橋本80〕。Ⅱ81～Ⅱ84は白磁椀。Ⅱ81～Ⅱ83は口縁部が玉縁状を呈し，Ⅱ84は口縁部が端反りになる。Ⅱ85は白磁皿。底部外面を露胎とし，見込みに文様を描く。Ⅱ86は白磁の合子蓋。Ⅱ87は砥石。最大幅3.0cm，現存最大長6.4cmをはかる。使用面は１面のみである。

Ⅱ88は土師器土釜。菅原正明の分類による摂津Ｃ２型であり〔菅原83〕，10世紀ごろの古い資料の混入である。Ⅱ89は一般に「塩壺」と呼ばれている土師器鉢。口径19.2cm，高さ16.2cmをはかり，内面と口縁部外面は撫でて仕上げ，外面は粘土紐の巻き上げ痕をそのまま残す。口縁部内面にのみ3.5cm前後の幅で炭化物の付着が観察される。中世の木製置き炉には金属製や土製の火容が仕掛けられており〔梅川94〕，置き炉の火容として利用されたことを示す痕跡の可能性がある。京都大学構内では，110・143・241地点の調査で類例が報告されている〔五十川83，五十川・宮本88，古賀99〕。

Ⅱ90～Ⅱ93は東播系須恵器。Ⅱ90は甕，Ⅱ91～Ⅱ93はすり鉢。Ⅱ94・Ⅱ95は瓦器羽釜。口径は，Ⅱ94が16.0cm，Ⅱ95が20.2cmで，いずれも体部は丸みを帯びる。Ⅱ96は瓦器盤。体部は丸みを帯び，三脚がつく。内外面とも剥落が著しい。

以上のＳＥ14から出土した遺物は，12世紀末13世紀初頭ごろのものであろう。

Ⅱ97～Ⅱ105はＳＸ17出土遺物。Ⅱ97～Ⅱ104は土師器皿。Ⅱ97～Ⅱ99は２段撫で手法で，それぞれＣ$_3$類，Ｃ$_4$類，Ｃ$_5$類に比定でき，口径15cm前後である。Ⅱ100～Ⅱ104は１段撫で面取り手法Ｄ$_4$類で，Ⅱ100・Ⅱ101は口径15cm前後のＡⅠ，Ⅱ102～Ⅱ104は口径９cm前後のＡⅡである。Ⅱ105は灰釉陶器皿。見込みに圏線を１条めぐらす。口縁部を輪花に作る。これらは12世紀後葉ごろの資料である。

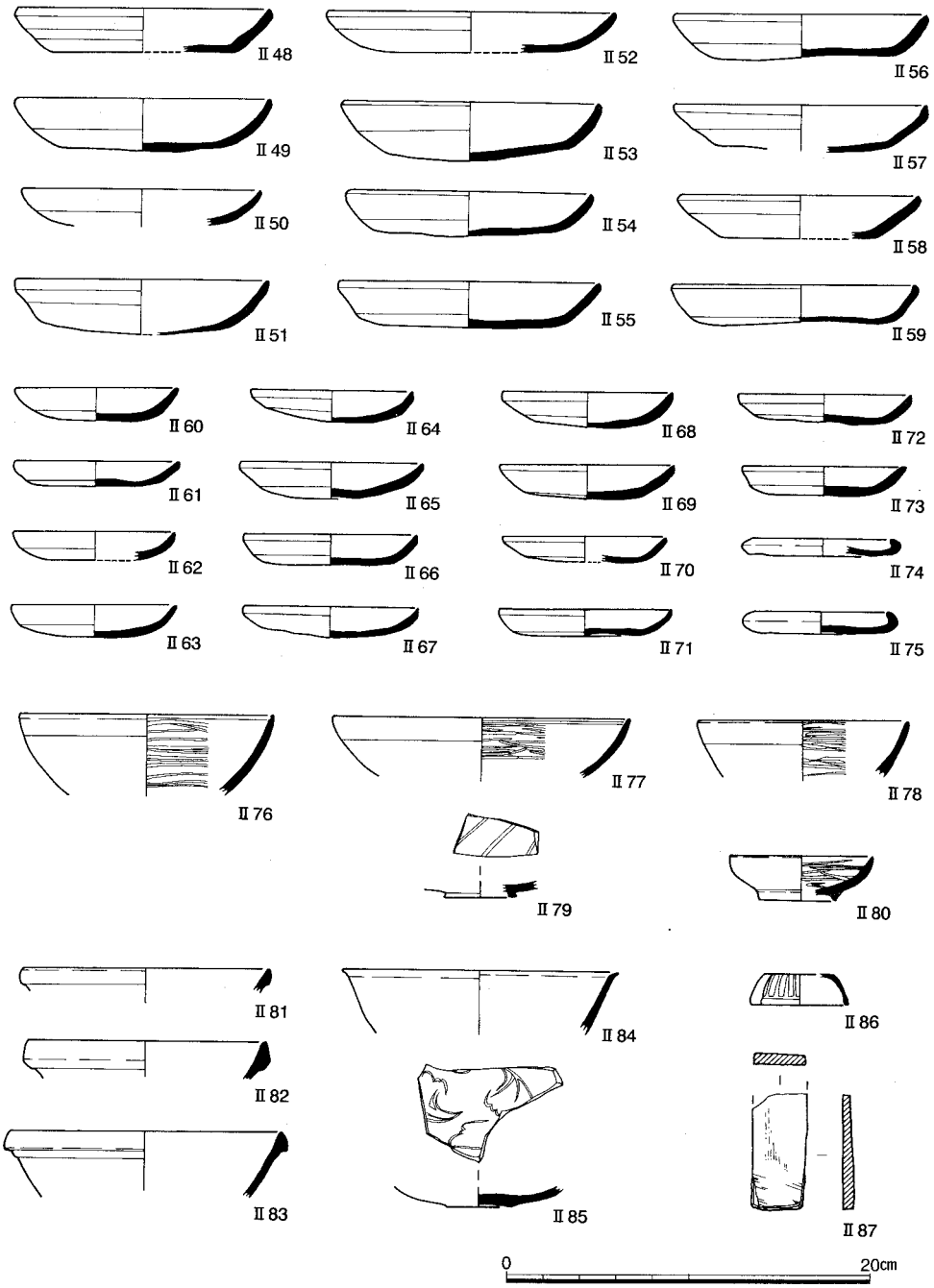


図51　ＳＥ14出土遺物(1)（Ⅱ48～Ⅱ75土師器，Ⅱ76～Ⅱ80瓦器，Ⅱ81～Ⅱ85白磁，Ⅱ87石製品）

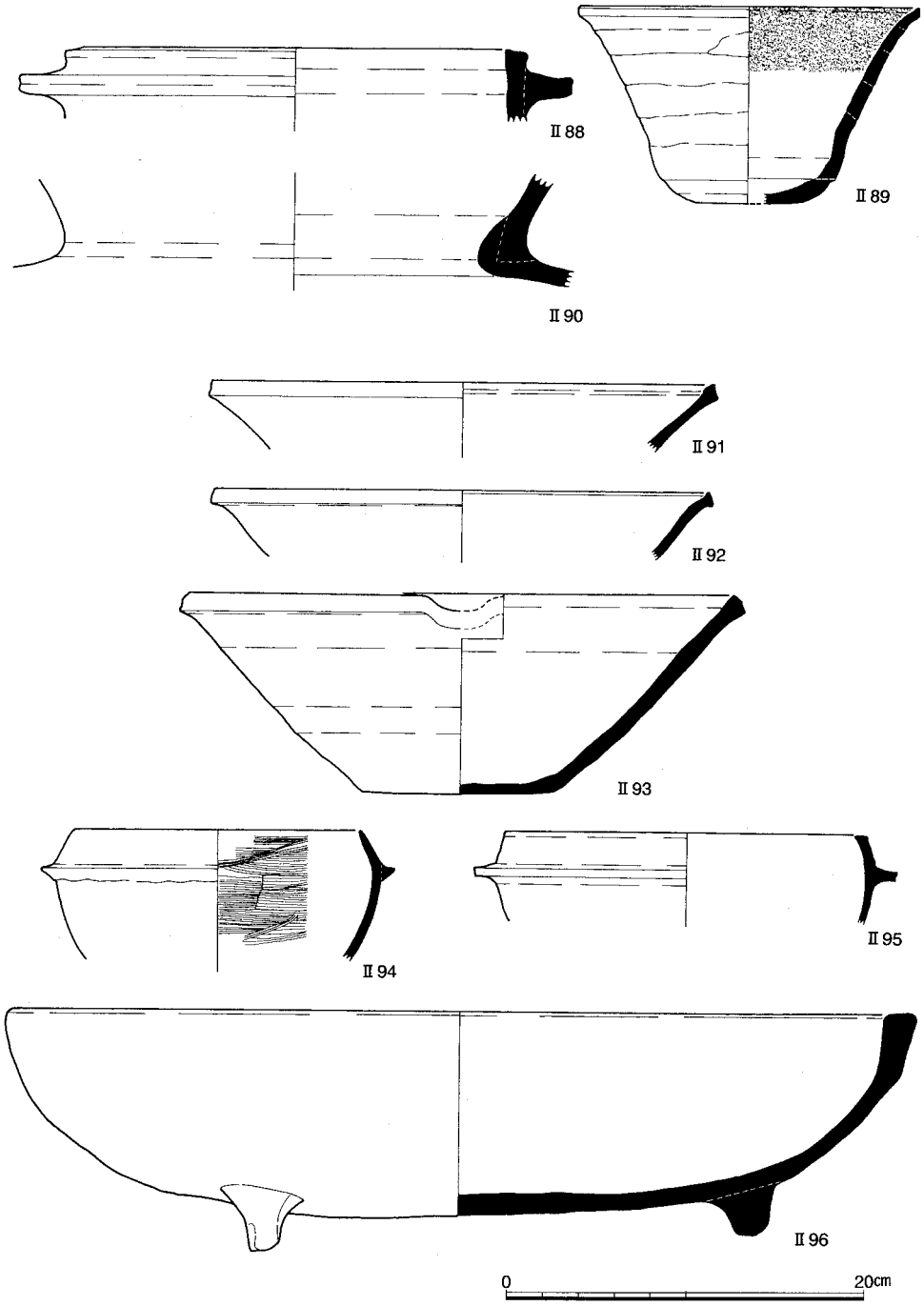


図52　ＳＥ14出土遺物(2)（Ⅱ88・Ⅱ89土師器，Ⅱ90～Ⅱ93須恵器，Ⅱ94～Ⅱ96瓦器）

Ⅱ106～Ⅱ113はＳＸ９出土遺物。Ⅱ106・Ⅱ107は口径16cm前後のⅢＡⅠで，C_3類およびD_2類。Ⅱ108～Ⅱ112は口径９～10cmのⅢＡⅡで，Ⅱ108・Ⅱ109はC_3類，Ⅱ110・Ⅱ111はD_3類，Ⅱ112はD_4類である。Ⅱ113は白磁で，口縁が玉縁状に肥厚する椀である。これらは12世紀後葉ごろの資料である。

Ⅱ114～Ⅱ120はＳＥ10裏込め出土遺物。Ⅱ114～Ⅱ116は口径13～17cmの土師器ⅢＡⅠ。いずれも１段撫で手法で，Ⅱ114はD_3類，Ⅱ115はD_5類，Ⅱ116はD_2類である。Ⅱ117・Ⅱ118は口径７～８cmの土師器ⅢＡⅡで，ともに１段撫で素縁手法D_3類。Ⅱ119は，底部外面に回転による糸切り痕を残す皿。内外面すべて回転撫でによって仕上げる。Ⅱ120は瓦器羽釜。鍔は上方へ傾き，体部は直線的である。

Ⅱ121～Ⅱ124はＳＸ12出土の土師器皿で，１段撫で素縁手法D_2類。口径は，Ⅱ121～Ⅱ123が11cm前後，Ⅱ124が7.7cmである。

Ⅱ125・Ⅱ126はＳＫ９出土の土師器皿。ともに口径10cm前後で，１段撫で面取り手法D_4類である。

Ⅱ127～Ⅱ138はＳＸ16出土土師器。Ⅱ127～Ⅱ137は皿で，口径はⅡ127が13cm，Ⅱ128～Ⅱ130が10～11cm，Ⅱ131～Ⅱ137が８cm前後である。口縁部形態は，D_3類が多く（Ⅱ127・Ⅱ128・Ⅱ132～Ⅱ135），C_4類（Ⅱ130），D_4類（Ⅱ136・Ⅱ137），D_5類（Ⅱ129）も認められる。Ⅱ138は受皿。

ＳＫ９・ＳＥ10裏込め・ＳＸ12・ＳＸ16出土遺物は13世紀前葉ごろの資料であろう。

Ⅱ139～Ⅱ176はＳＫ３出土遺物。Ⅱ139～Ⅱ150は赤褐色を呈する土師器皿，Ⅱ151～Ⅱ174は灰白色を呈する土師器椀。土師器の皿と椀での，こうした明瞭な色調の違いは，後述するＳＫ５・ＳＫ10・ＳＥ15でも同様である。Ⅱ139～Ⅱ144はⅢＡⅠ，Ⅱ145～Ⅱ150はⅢＡⅡで，ＡⅠは11cm，ＡⅡは８cmに口径のピークがある（表６）。口縁形態は，ⅢＡⅠでは１段撫で素縁手法E_1類が多く，E_3類，E_4類がこれに続き，ⅢＡⅡではE_1類が過半数を占め，E_3類がそれに次ぐ。Ⅱ151～Ⅱ162は椀ＡⅠ，Ⅱ163～Ⅱ174は椀ＡⅡで，ＡⅠは12cm，ＡⅡは７cmに口径のピークがある。椀ＡⅡの底部は，凹み底となる。口縁形態は，椀ＡⅠではE_1類が６割以上を占め，E_2類がそれに次ぎ，ＡⅡではE_1類が多く，E_2類，E_3類がそれに続く。Ⅱ175は土師器の羽釜。断面三角形の鍔がつく。口径14cm。Ⅱ176は瓦器鍋。口縁部は屈曲があまく外方へ立ち上がる。

Ⅱ177～Ⅱ189はＳＫ５出土の土師器皿および椀。Ⅱ177～Ⅱ182は赤褐色を呈する皿で，口径10～12cm。Ⅱ177・Ⅱ178はE_3類，Ⅱ179～Ⅱ181はE_4類，Ⅱ182はE_1類。Ⅱ183～Ⅱ

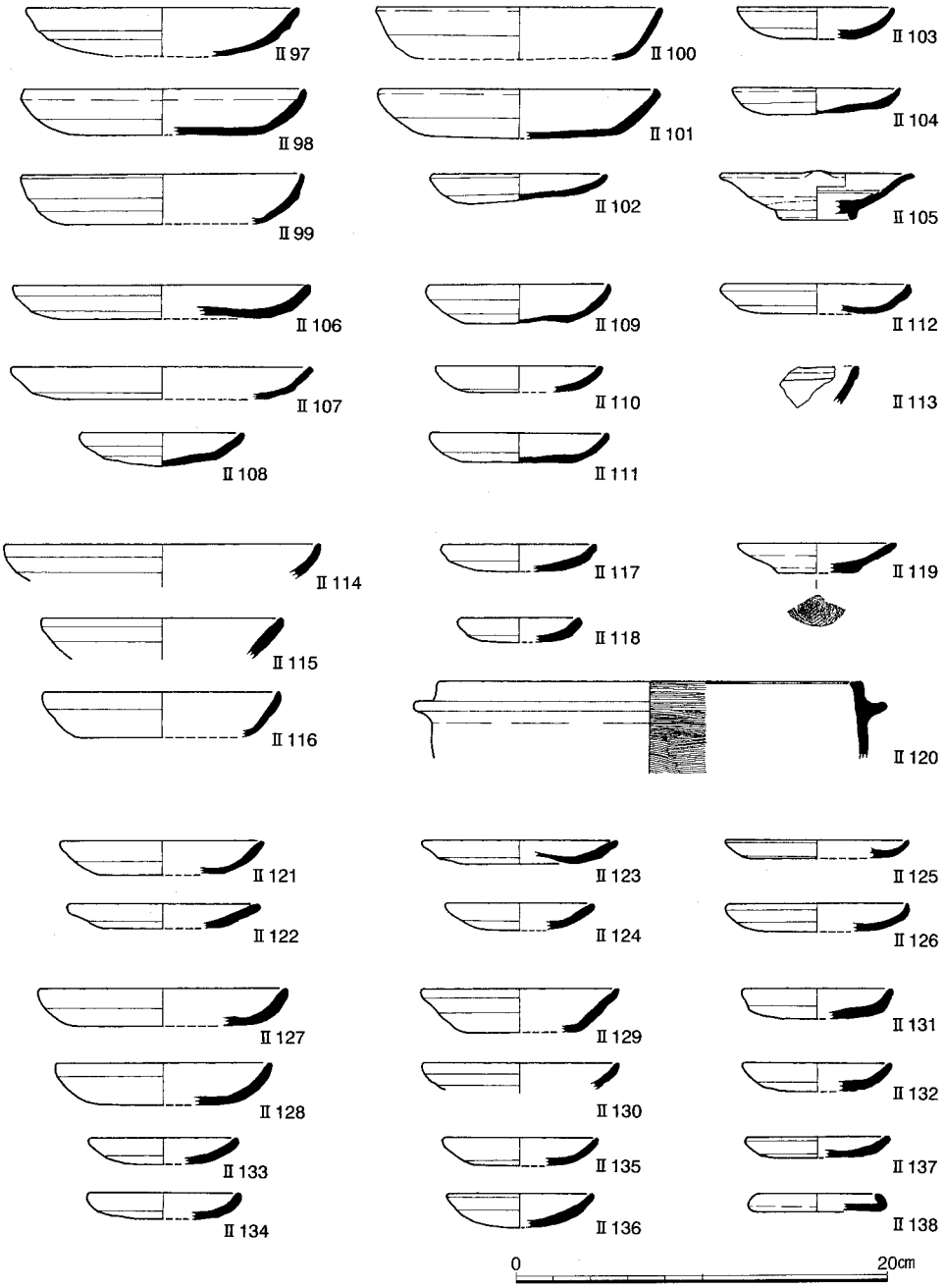


図53　ＳＸ17出土遺物（Ⅱ97～Ⅱ104土師器，Ⅱ105灰釉陶器），ＳＸ９出土遺物（Ⅱ106～Ⅱ112土師器，Ⅱ113白磁），ＳＥ10出土遺物（Ⅱ114～Ⅱ119土師器，Ⅱ120瓦器），ＳＸ12出土遺物（Ⅱ121～Ⅱ124土師器），ＳＫ９出土遺物（Ⅱ125・Ⅱ126土師器），ＳＸ16出土遺物（Ⅱ127～Ⅱ138土師器）

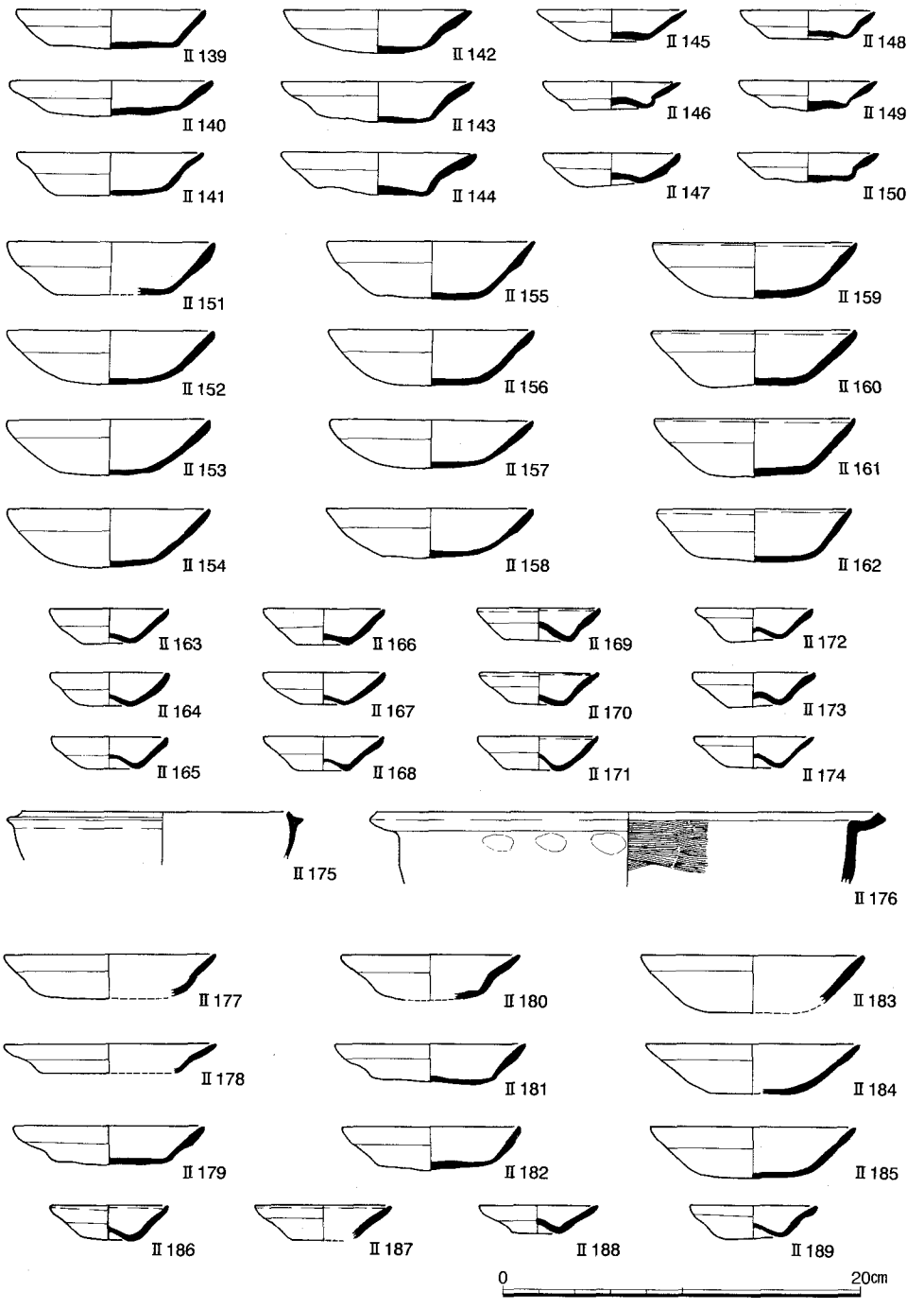


図54　ＳＫ３出土遺物（Ⅱ139～Ⅱ175土師器，Ⅱ176瓦器），ＳＫ５出土遺物（Ⅱ177～Ⅱ189土師器）

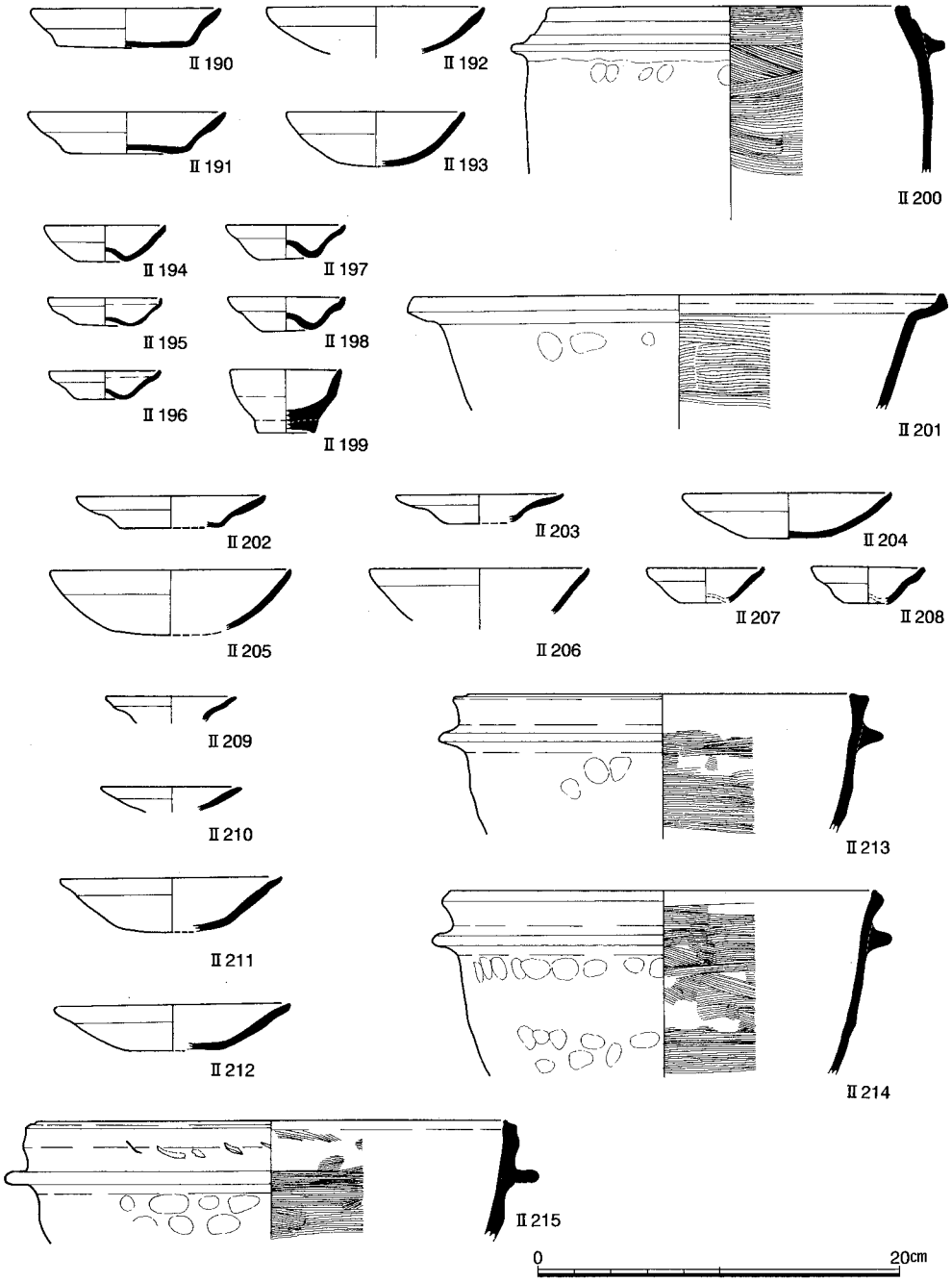


図55　ＳＫ10出土遺物（Ⅱ190～Ⅱ198土師器，Ⅱ199灰釉系陶器，Ⅱ200・Ⅱ201瓦器），ＳＥ15出土遺物（Ⅱ202～Ⅱ208土師器），ＳＸ13出土遺物（Ⅱ209～212土師器，Ⅱ213～Ⅱ215瓦器）

189は灰白色を呈する椀で，Ⅱ183～Ⅱ185は口径12cm前後の椀ＡⅠ，Ⅱ186～Ⅱ189は口径７cm前後の椀ＡⅡで凹み底となる。口縁形態は，ＡⅠではＥ$_1$類が多く，ＡⅡではＥ$_2$・Ｅ$_3$・Ｅ$_4$類が認められる。

Ⅱ190～Ⅱ201はＳＫ10出土遺物。Ⅱ190・Ⅱ191は赤褐色の土師器皿，Ⅱ192～Ⅱ198は灰白色の土師器椀。皿は口径11cmにピークがくるＡⅠと７cmにピークがあるＡⅡがあり，口縁形態はＡⅠではＥ$_3$類が主体を占め，ＡⅡではＥ$_1$・Ｅ$_2$・Ｅ$_3$類が認められる（表６）。椀は口径10～11cmにピークがあるＡⅠと７cmにピークがあり凹み底となるＡⅡがある。口縁形態はＡⅠではＥ$_1$類が圧倒的に多く，ＡⅡではＥ$_2$類，Ｅ$_3$類，Ｅ$_1$類の順に一定量を占める。Ⅱ199は灰釉系陶器の小杯。断面三角形の低い高台がつく。Ⅱ200は瓦器羽釜。口縁部と鍔の間を断面「レ」状の段が２条めぐる。Ⅱ201は瓦器鍋。口縁部の屈曲は立ち上がりがあまく，体部は直線的である。

Ⅱ202～Ⅱ208はＳＥ15出土土師器。Ⅱ202・Ⅱ203は赤褐色の土師器皿で，Ｅ$_4$類とＥ$_3$類。Ⅱ204～Ⅱ208は灰白色の土師器椀。

ＳＫ３・ＳＫ５・ＳＫ10・ＳＥ10から出土した遺物は，14世紀後半のものであろう。

Ⅱ209～Ⅱ215はＳＸ13出土遺物。Ⅱ209～Ⅱ212は土師器皿。14世紀の段階で認められた皿と椀の違いは，椀の器高の低下と褐色化にともない不明瞭になる。Ⅱ209はＥ$_2$類，Ⅱ210～Ⅱ212はＦ$_2$類。Ⅱ213～Ⅱ215は瓦器羽釜。外面は指押さえ，内面は刷毛目調整で仕上げる。

Ⅱ216～Ⅱ235はＳＫ６出土遺物。Ⅱ216～Ⅱ229は土師器皿。口径は15cm前後，10～12cm，６～８cmの３法量を認めることができる。口縁形態は，Ⅱ222・Ⅱ227がＥ$_1$類，Ⅱ223・Ⅱ224がＥ$_2$類，Ⅱ225・Ⅱ226がＥ$_3$類，Ⅱ228がＥ$_4$類，Ⅱ216・Ⅱ229がＦ$_1$類，Ⅱ217はＦ$_2$類，Ⅱ218～Ⅱ220がＦ$_3$類，Ⅱ221がＦ$_4$類である。

Ⅱ230は鉄釉陶器，Ⅱ231・Ⅱ232は灰釉系陶器である。Ⅱ231は卸皿で，口縁端部を内側に折り返している。Ⅱ233は青磁椀。高台および底部外面を露胎とする。外面は櫛歯文を垂下させ，内面は２条１単位の沈線で曲線文を描き，そのあいだを櫛歯による刺突で埋めている。13世紀の遺物の混入であろう。Ⅱ235は信楽すり鉢。口縁部に面取りを施し，外側端部がやや張り出す。外面は撫で仕上げ，内面は剥落が著しく，仕上げ方および，すり目の有無は不明である。黄白色を呈し，焼成は軟質である。山田猛の分類によるⅡｂ型式にあたる〔山田90〕。

Ⅱ236～Ⅱ238はＳＥ11裏込め，Ⅱ239～Ⅱ249はＳＥ11埋土出土遺物。Ⅱ236～Ⅱ244は土

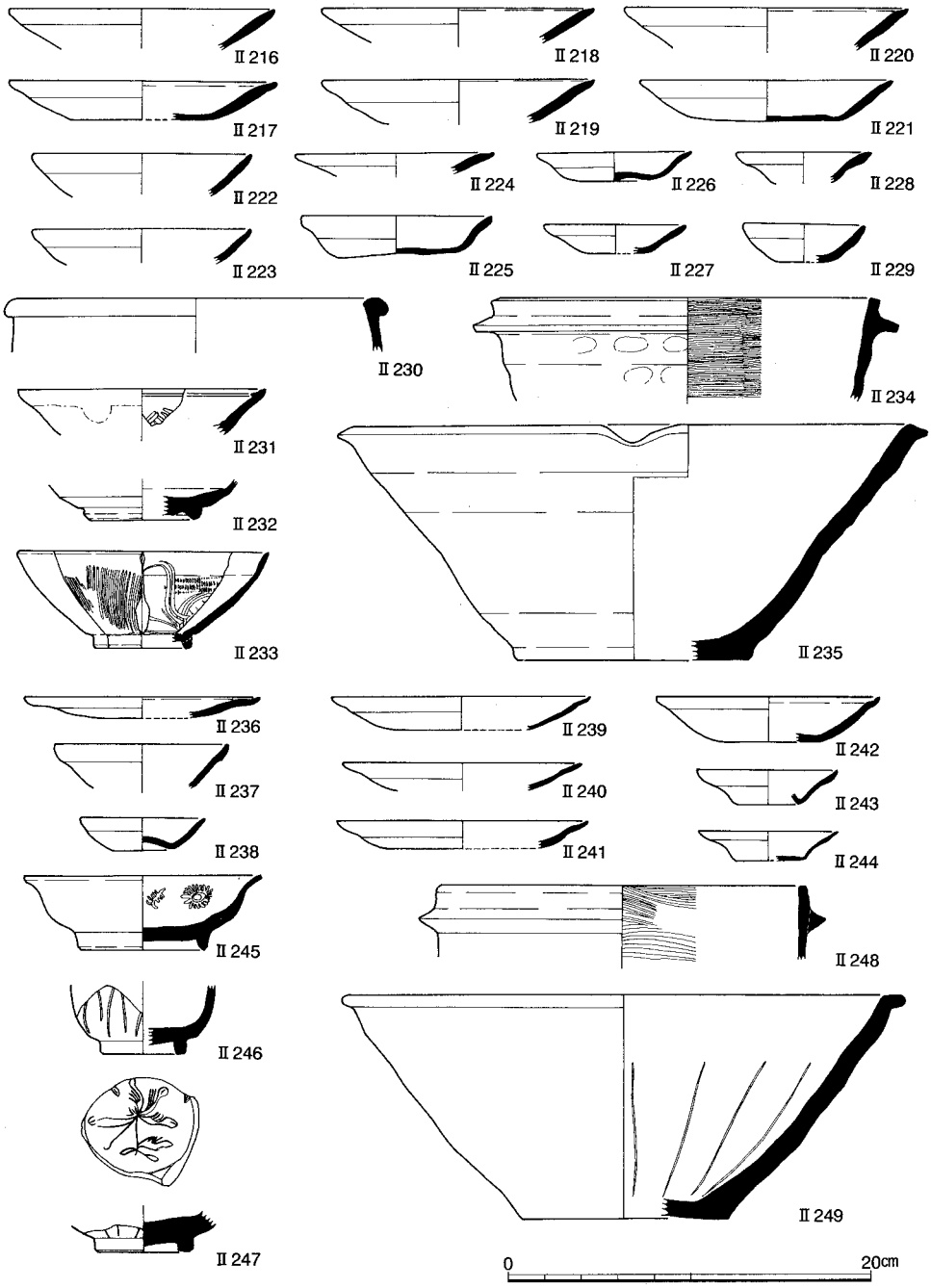
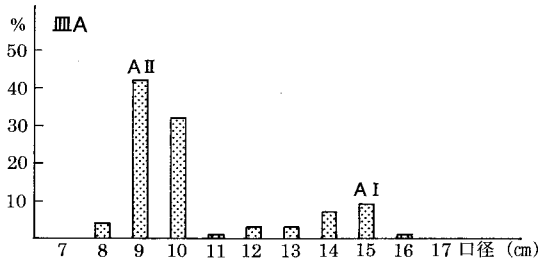


図56　ＳＫ６出土遺物（Ⅱ216～Ⅱ229土師器，Ⅱ230鉄釉陶器，Ⅱ231・Ⅱ232灰釉系陶器，Ⅱ233青磁，Ⅱ234瓦器，Ⅱ235信楽），ＳＥ11出土遺物（Ⅱ236～Ⅱ244土師器，Ⅱ245白磁，Ⅱ246・Ⅱ247青磁，Ⅱ248瓦器，Ⅱ249信楽）

表６　ＳＥ14・ＳＫ３・ＳＫ10出土土師器計測結果

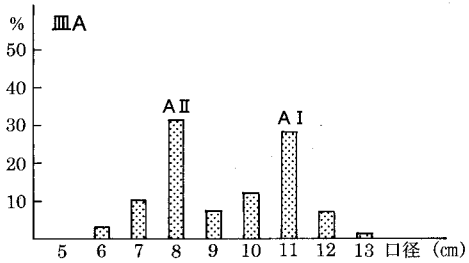
SE14

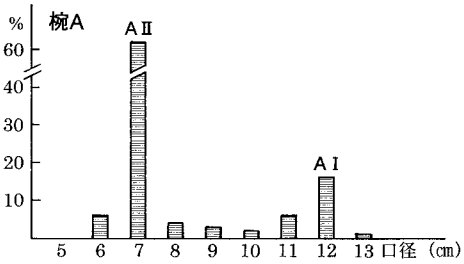
口縁形態	ⅢＡⅡ 80.6個体	ⅢＡⅠ 23.4個体
C_3類	1.6%	4.6%
D_3類	53.8%	26.6%
D_4類	22.7%	27.0%
D_5類	21.9%	35.0%
D_6類		6.8%
合 計	100.0%	100.0%



SK3

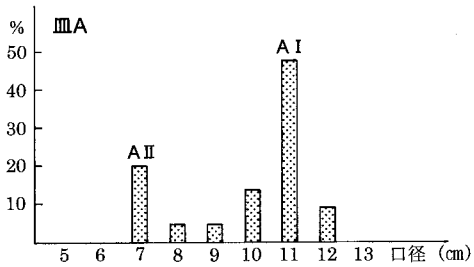
口縁形態	ⅢＡⅡ 26.9個体	ⅢＡⅠ 24.6個体	椀ＡⅡ 7.6個体	椀ＡⅠ 23.0個体
E_1類	52.0%	41.3%	40.8%	66.3%
E_2類	3.1%	1.7%	33.7%	31.9%
E_3類	26.3%	29.2%	23.0%	1.4%
E_4類	18.6%	27.8%	2.5%	0.4%
合 計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

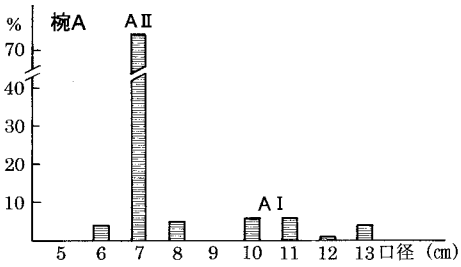




SK10

口縁形態	ⅢＡⅡ 1.1個体	ⅢＡⅠ 2.6個体	椀ＡⅡ 14.7個体	椀ＡⅠ 3.0個体
E_1類	30.9%	28.8%	18.1%	88.9%
E_2類	30.9%	6.4%	35.7%	8.3%
E_3類	38.2%	60.9%	32.9%	2.8%
E_4類		3.9%	13.3%	
合 計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%





師器皿。口縁形態はⅡ238がＥ$_1$類，Ⅱ243がＥ$_2$類，Ⅱ244がＥ$_3$類，Ⅱ236・Ⅱ242がＦ$_3$類，Ⅱ239～Ⅱ241がＦ$_4$類。

Ⅱ245は白磁皿。口縁部内面にスタンプによる花文をもつ。Ⅱ246・Ⅱ247は青磁椀。外面に蓮弁文を施し，Ⅱ247は見込みに花文を描いている。Ⅱ248は瓦器羽釜。直線的な体部に，断面三角の鍔がつく。Ⅱ249は信楽すり鉢。口縁端部がつよく外側に張り出す。内面には，篦による１条１単位のすり目をもつ。褐色を呈し，焼成は硬質である。山田分類のⅡｂ型式，木戸雅寿の分類のＢ１ａ類にあたる〔山田90，木戸95〕。

ＳＸ13，ＳＫ６，ＳＥ11出土遺物は，15世紀後半ごろのものであろう。

近世の遺物　Ⅱ250～Ⅱ302は，ＳＤ４出土遺物。これらの遺物は，Ｘ＝955付近を中心にまとまって発見され，用をなさなくなった器物が一括廃棄されたものであろう。

Ⅱ250～Ⅱ271は土師器皿。見込みに圏線をもつⅡ250～Ⅱ264と圏線をもたないⅡ265～Ⅱ271に大別される。口径は，圏線をもつものは12～13cmにピークをもち，Ⅱ250のように口径17cm前後の大型品もみられる。圏線は断面形がＵ字状を呈し，外側端部は体部との境が不明瞭である。圏線をもつ皿は，口縁端部を中心に煤が付着するものが多い。圏線をもたない皿は，口径10cm前後と７cm前後にピークをもつ。

Ⅱ272は焼塩壺。筒形で口縁端部に蓋受けの段をもつ。体部は型作りで，底部は小粘土塊を充填して成形する。口径5.5cm，最大径7.1cm，器高7.4cm。渡辺誠の分類によるＢ類〔渡辺85〕で刻印をもつが，外面は剥落がひどく「泉」を除いて判読できない。

Ⅱ273～Ⅱ276は天目椀。Ⅱ277・Ⅱ278は志野焼の皿。底部外面に，Ⅱ277は１個以上，Ⅱ278は３個の目跡が残る。Ⅱ279は黒織部の椀。内面全体と外側面の一部を残して鉄釉を施す。鉄釉をかけない部分に鉄絵で二重四角文を描き，長石釉を掛けている。Ⅱ280～Ⅱ283は唐津焼の椀・皿。Ⅱ280・Ⅱ281は椀で，Ⅱ280は高台に５個の砂目が残る。Ⅱ282・Ⅱ283は皿で，Ⅱ282は見込みに３個の砂目が残り，Ⅱ283は内面に鉄絵を描いている。Ⅱ284は，内外面とも灰緑色の釉のかかる京焼系の陶器椀。Ⅱ285は陶器皿。内面から口縁部外面にかけて白色釉の下地に淡緑色の釉が施される。Ⅱ286は陶器花生。内外面とも濃緑色の釉がかかり，内面には叩きの痕跡である青海波文がわずかに残る。高取焼あるいは上野焼とみられる。Ⅱ287は伊万里系の青磁椀。Ⅱ288～Ⅱ290は染付。Ⅱ288は天目形椀，Ⅱ289は筒形椀で，初期伊万里である。Ⅱ290は竹笹文を描く小杯。Ⅱ291・Ⅱ292は輸入磁器青花で，Ⅱ291は椀，Ⅱ292は皿である。Ⅱ291・Ⅱ292ともに畳付の釉は掻き取られているが，Ⅱ291は畳付周辺に砂が付着している。

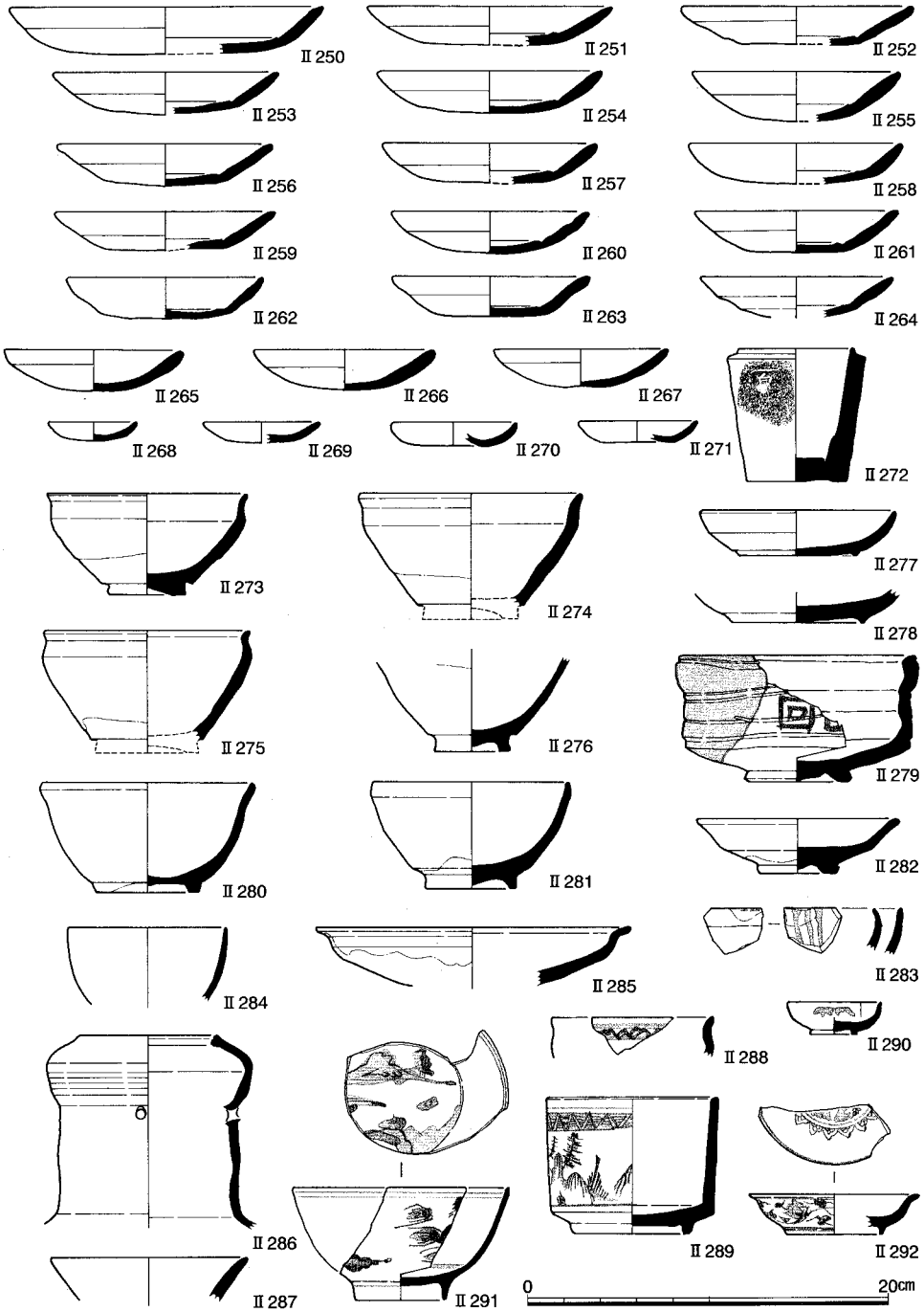


図57　ＳＤ４出土遺物(1)（Ⅱ250～Ⅱ272土師器，Ⅱ273～Ⅱ286陶器，Ⅱ287青磁，Ⅱ288～Ⅱ290染付，Ⅱ291・Ⅱ292青花）

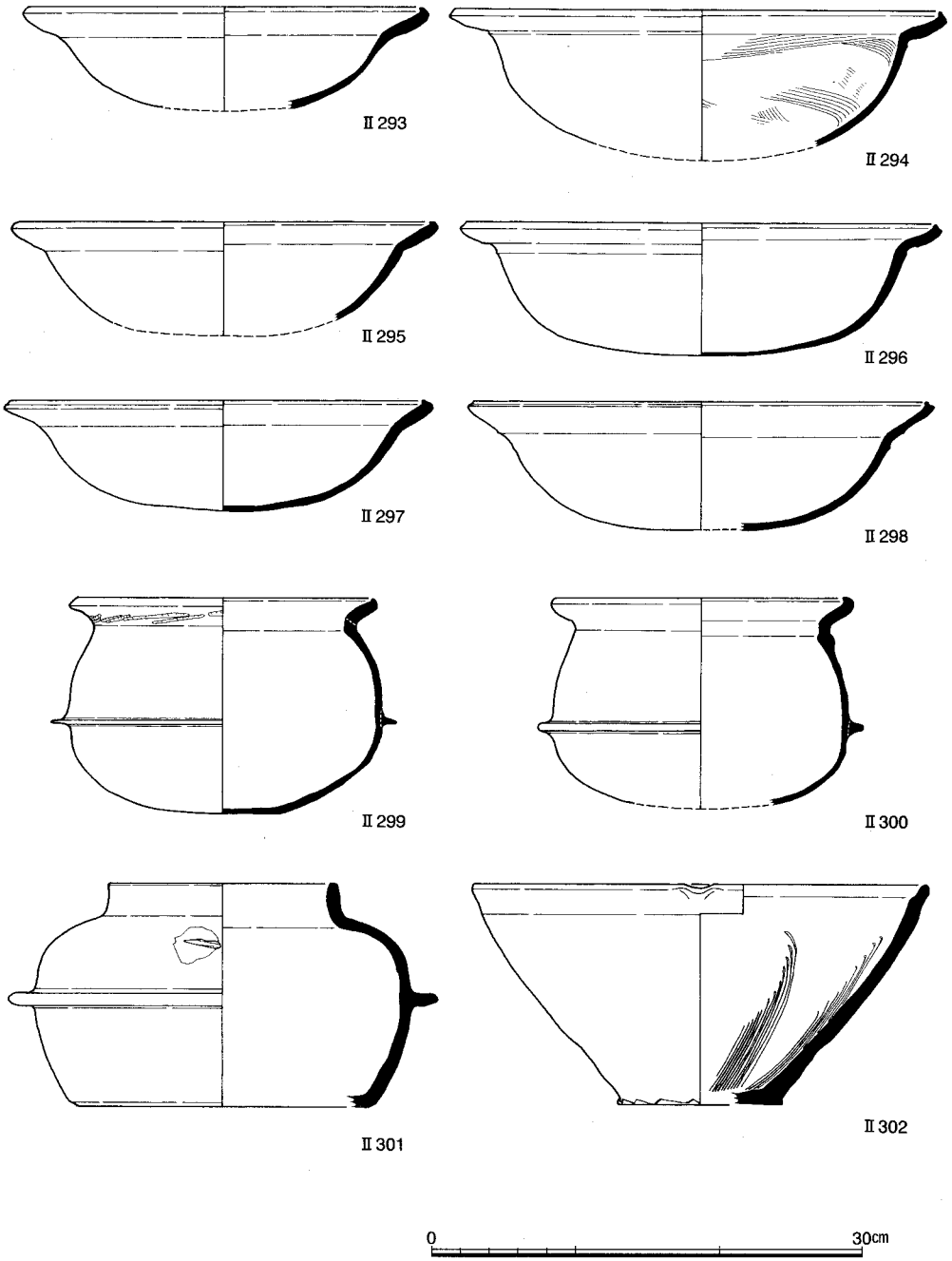


図58　ＳＤ４出土遺物(2)（Ⅱ293～Ⅱ300土師器，Ⅱ301・Ⅱ302瓦器）　縮尺1/5

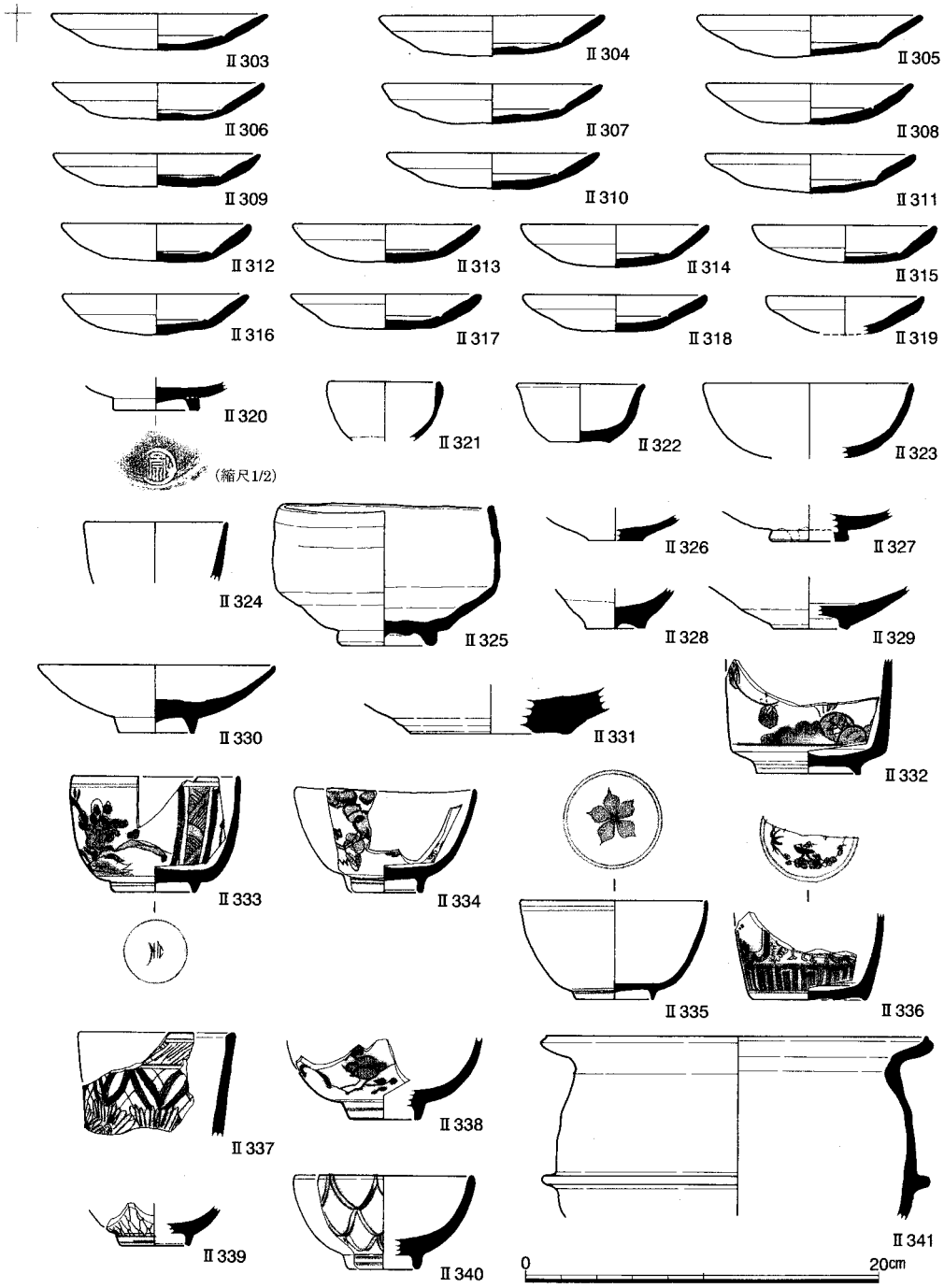


図59　ＳＤ５出土遺物（Ⅱ303～Ⅱ320・Ⅱ341土師器，Ⅱ321～Ⅱ329陶器，Ⅱ330・Ⅱ331青磁，Ⅱ332～Ⅱ340染付）

Ⅱ293～Ⅱ300は土師器煮炊具。Ⅱ293～Ⅱ298は，いわゆる土鍋である。半球形の体部から口縁部が外へ開く形態で，口縁端部は内側へ突出させる。口径27～29cm，器高８cm前後と口径32～34cm，器高９cm前後の２つの法量が認められる。内外面とも丁寧に撫でて仕上げているが，Ⅱ294は内面に刷毛目調整の痕跡が残り，Ⅱ295の外面には叩きかと思われる痕跡がかすかに残る。口縁部外面および底部内面を中心に，炭化物の付着が著しい。Ⅱ299・Ⅱ300は，いわゆる土釜である。やや下ぶくれの球形の体部に外傾する口縁部がつき，体部中央に鍔をめぐらしている。口縁端部は内側へ突出させる。内面外面ともに撫でて仕上げており，Ⅱ299の口縁部外面には棒状整形具による左下がりの圧痕がみられる。菅原正明の分類による大和Ｉ２型である〔菅原83〕。Ⅱ301は瓦器羽釜で，茶釜を模したとみられる形態を呈する。体上部に，水平方向に貫通孔をもつ把手の剥落痕跡がみられる。Ⅱ302は瓦器すり鉢。口縁部内面やや下がった位置に段がつく。12条１単位のすり目をもつ。

ＳＤ４出土遺物は，17世紀前半の所産とみられるものが主体を占める。ただし，Ⅱ272・Ⅱ290のように，17世紀後半以降に下る遺物も少量ではあるが出土している。

Ⅱ303～Ⅱ341はＳＤ５出土遺物。Ⅱ303～Ⅱ319は土師器皿。ほとんどが見込みに圏線をもつ皿で，Ⅱ319のように圏線をもたないものはわずかである。圏線をもつ皿の口径は，11～12cmにピークをもち，圏線は断面レ字状を呈する。Ⅱ320は轆轤成形の土師質椀ないし皿である。付け高台で，底部外面に銘をもつ。Ⅱ321～Ⅱ329は陶器の椀・皿類。Ⅱ325は体部が屈曲する椀。口縁部は緩やかな波状を呈し，内面底部には，径8.5cmの茶溜まりをもつ。胎土は乳白色を呈し，鉄化粧を施した後，全面に黄緑色に発色する灰釉を掛けている。Ⅱ328は唐津椀の底部。Ⅱ330・Ⅱ331は伊万里青磁の皿。Ⅱ330は見込みを蛇の目釉はぎし，Ⅱ331は蛇の目高台で畳付に鉄銹を施す。Ⅱ332～Ⅱ340は染付椀。Ⅱ336は色絵染付の筒形椀で，蛇の目凹形高台である。Ⅱ338は見込みを蛇の目釉はぎとする。花文の発色は悪く，濃褐色を呈する。Ⅱ339は一重網目文，Ⅱ340は二重網目文を描く。Ⅱ341は土釜。外面に煤が薄く付着する。口径21.6cm。

ＳＤ５出土の土師器皿は，ＳＤ４出土遺物と比較して，口径の縮小や圏線の形状の変化などから，新しい様相を示している。また染付もⅡ338～Ⅱ340のように，18世紀に下るとみられるものも含んでおり，ＳＤ４よりは新しく，17世紀後半～18世紀前半の遺物を中心にするものと理解する。

Ⅱ342～Ⅱ348はＳＥ９出土遺物。Ⅱ342・Ⅱ343は土師器皿。Ⅱ342は口縁端部に煤が付着する。Ⅱ344は土鍋。口径30cm前後で，口縁端部から内面にかけて，回転撫でで仕上げ

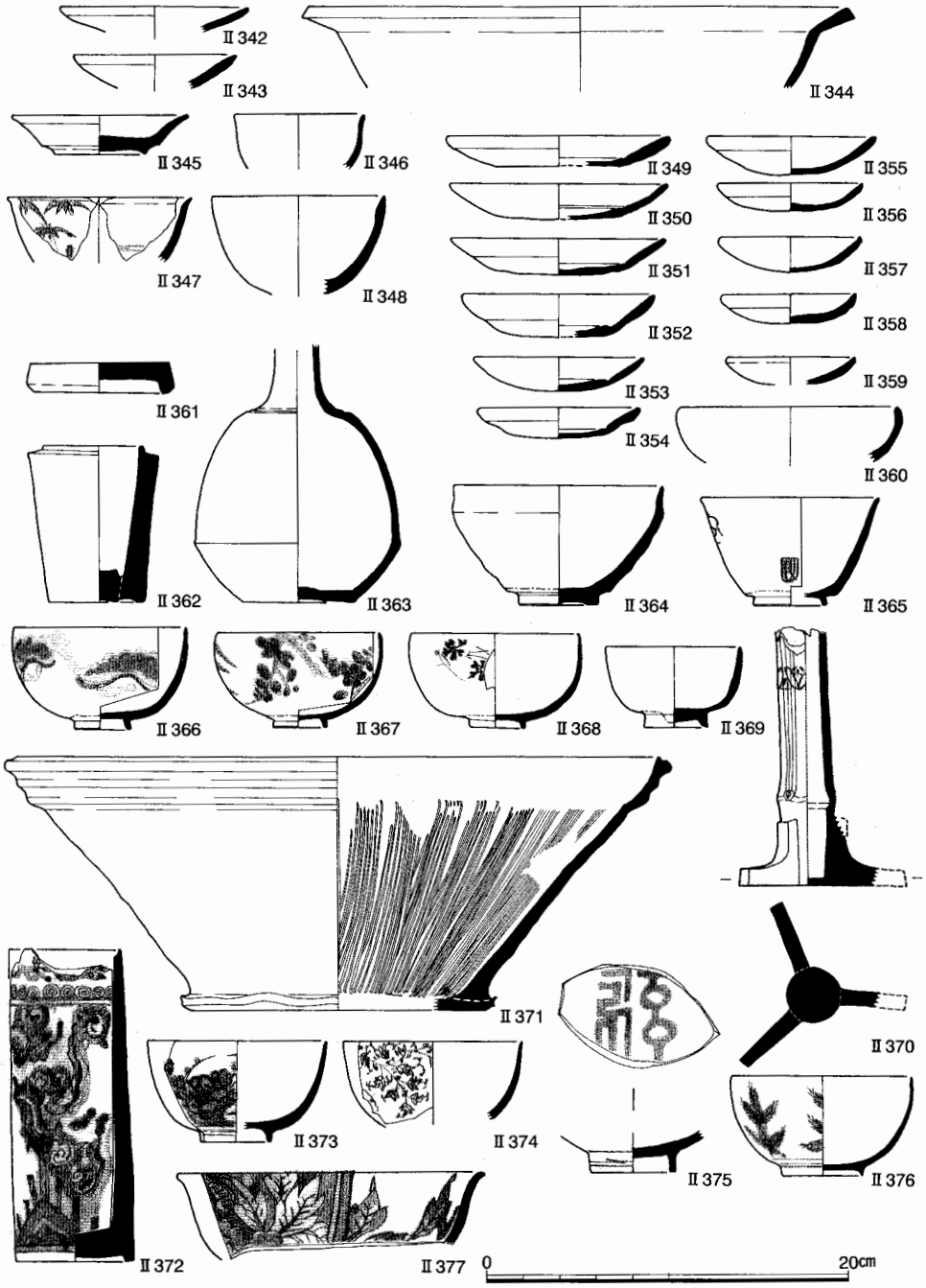


図60　ＳＥ９出土遺物（Ⅱ342～Ⅱ344土師器，Ⅱ345・Ⅱ346陶器，Ⅱ347染付，Ⅱ348青磁），
ＳＥ７・８出土遺物（Ⅱ349～Ⅱ362土師器，Ⅱ363～Ⅱ371陶器，Ⅱ372～Ⅱ377染付）

ている。Ⅱ345は瀬戸・美濃系の皿。淡緑色の釉を全面に施す。Ⅱ346は鉄釉を全面に施した小椀。Ⅱ347は竹笹文を描く染付椀。Ⅱ348は伊万里青磁の椀。

Ⅱ349～Ⅱ377はＳＥ７・８出土遺物。Ⅱ349～Ⅱ359は土師器皿。Ⅱ349～Ⅱ354は見込みに圏線をもつ。Ⅱ360は，回転台整形の土師器椀。Ⅱ361は焼塩壺の蓋。内面には布目痕を残す。Ⅱ362は焼塩壺の身。筒形で口縁端部に蓋受けの段をもつ。体部内面は型作りによる布の圧痕を残し，底部は小粘土塊を充填して作っている。刻印銘はみられない。口径5.2cm前後，最大径7.8cm，器高8.5cm。身，蓋ともに渡辺誠の分類によるＢ類である〔渡辺85〕。Ⅱ363は陶器壺。Ⅱ364は天目椀。Ⅱ365～Ⅱ368は京焼系陶器の椀。Ⅱ365は体下部に赤絵で銘をもつ。Ⅱ369は瀬戸・美濃系の小椀で，底部を除いて灰緑色の釉を施す。Ⅱ370

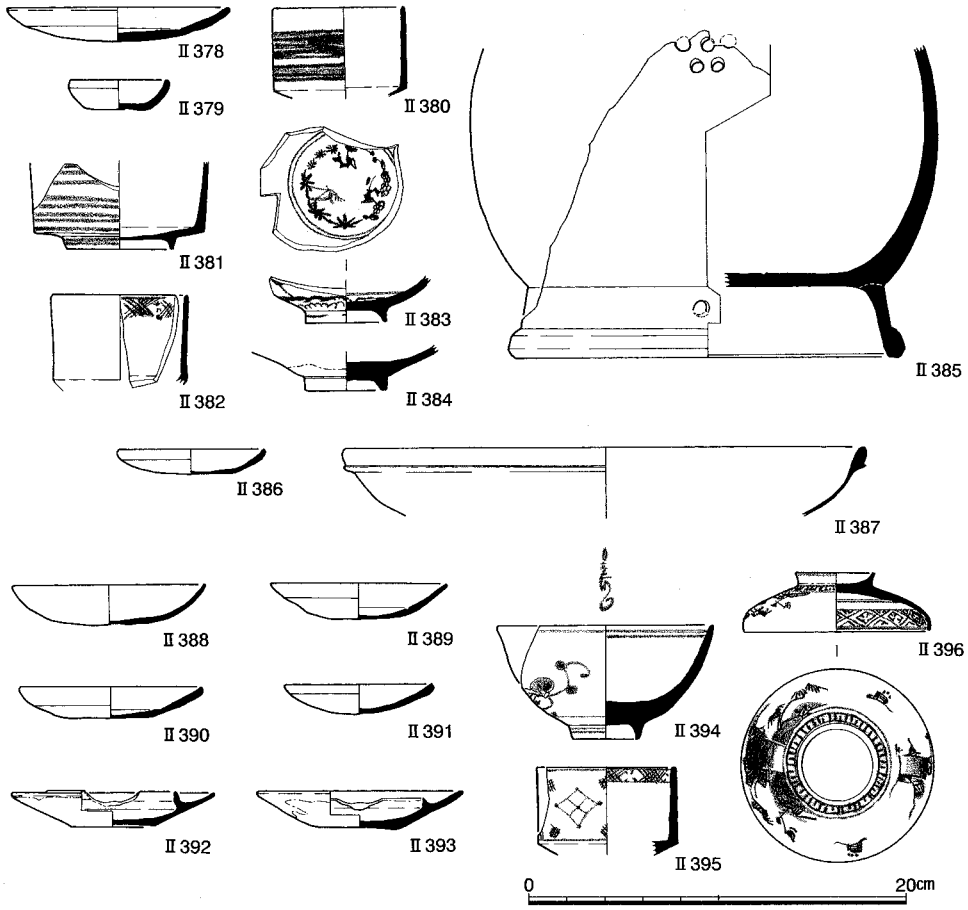


図61　ＳＥ２出土遺物（Ⅱ378・Ⅱ379・Ⅱ385土師器，Ⅱ380陶器，Ⅱ381～Ⅱ383染付，Ⅱ384白磁），
ＳＥ５出土遺物（Ⅱ386・Ⅱ387土師器），
ＳＸ１出土遺物（Ⅱ388～Ⅱ391土師器，Ⅱ392・Ⅱ393陶器，Ⅱ394～Ⅱ396染付）

は細長い円筒の瓶の形態を呈する線香筒。竹を模しており，三足がつく。底面を除いて淡黄緑色の釉を施し，鉄絵で文様を描く。Ⅱ371は信楽のすり鉢。長石粒を多く含む黄褐色の胎土に，鉄泥を全面に施す。口縁部外面に２条の凹線を横走させて縁帯状に作り，端面には１条の沈線を巡らしている。すり目は８条１単位で，見込みにも斜格子状に施している。

Ⅱ372は染付の花生。筒形の形態で，畳付のみ無釉とする。器高17.2cmをはかる。Ⅱ373～Ⅱ375は染付椀。Ⅱ373はコンニャク印判と手描きの文様を組み合わせて草花文で飾る。Ⅱ375は見込みに「福」の字をデザイン化して施す。Ⅱ376は底裏に「太明年製」の銘をもつ。Ⅱ377は青磁染付の鉢。外面には青磁釉を施し，内面は草木文で飾る。

ＳＥ９およびＳＥ７・８出土遺物は，18世紀前葉～中葉ごろのものであろう。

Ⅱ378～Ⅱ385はＳＥ２出土遺物。Ⅱ378・Ⅱ379は土師器皿。Ⅱ380は陶器椀。Ⅱ381～Ⅱ383は染付。Ⅱ382は外面青磁釉をかけている。Ⅱ384は白磁で，見込みを蛇の目釉はぎとする。Ⅱ385は土師質の焜炉。外側端部が丸く肥厚する脚台がつき，胴部は内彎する。胴中央付近に，５穴以上からなる通風口をもつ。胴部上半には煤が付着する。

Ⅱ386・Ⅱ387はＳＥ５出土遺物。Ⅱ386は土師器皿。Ⅱ387は土師器焙烙。口径28cmをはかる。Ⅱ388～Ⅱ396はＳＸ１出土遺物。Ⅱ388～Ⅱ391は土師器皿。Ⅱ388は灰白色を呈し，回転台を用いて内面は撫で，外面は磨いて仕上げる。見込みとそれに対応する外面底部に，一辺約５cmの三角形状に黒斑をもつ。Ⅱ392・Ⅱ393は陶器灯明受皿。Ⅱ394・Ⅱ395は染付椀，Ⅱ396は染付蓋。

ＳＥ２・ＳＥ５・ＳＸ１出土遺物は，19世紀前葉ごろのものであろう。

蓮月焼　幕末の歌人，大田垣蓮月が製作した，いわゆる蓮月焼がＳＫ４およびその周辺の包含層からまとまって出土したので，一括して解説する。隣接するＡＦ19区の調査で，土坑から蓮月焼がまとまって出土しており〔浜崎・宮本87〕，また前章で報告したようにＡＲ25区で発見例があり，京都大学構内では３例目となる。

出土量は実測図として掲げた29個体のほかに，急須・煎茶椀・鉢・涼炉などの破片資料があり，全体で40個体前後になろう。資料の中には，破損した断面に釉が流れているもの（Ⅱ424），ひび割れにより施釉していない面に釉が流れ出たもの（Ⅱ406），焼成時に生じたと考えられるひび割れをもつもの（Ⅱ400・Ⅱ407）などがあり，完形品はない。これらの出土資料は，焼き損ない品を捨てたものと考える。胎土は陶土を用い，無釉で焼き締めるものと施釉して仕上げるものがある。成形は手づくねによるものであり，釘彫りあるいは筆を用いて，自詠の和歌を書き込んでいる。

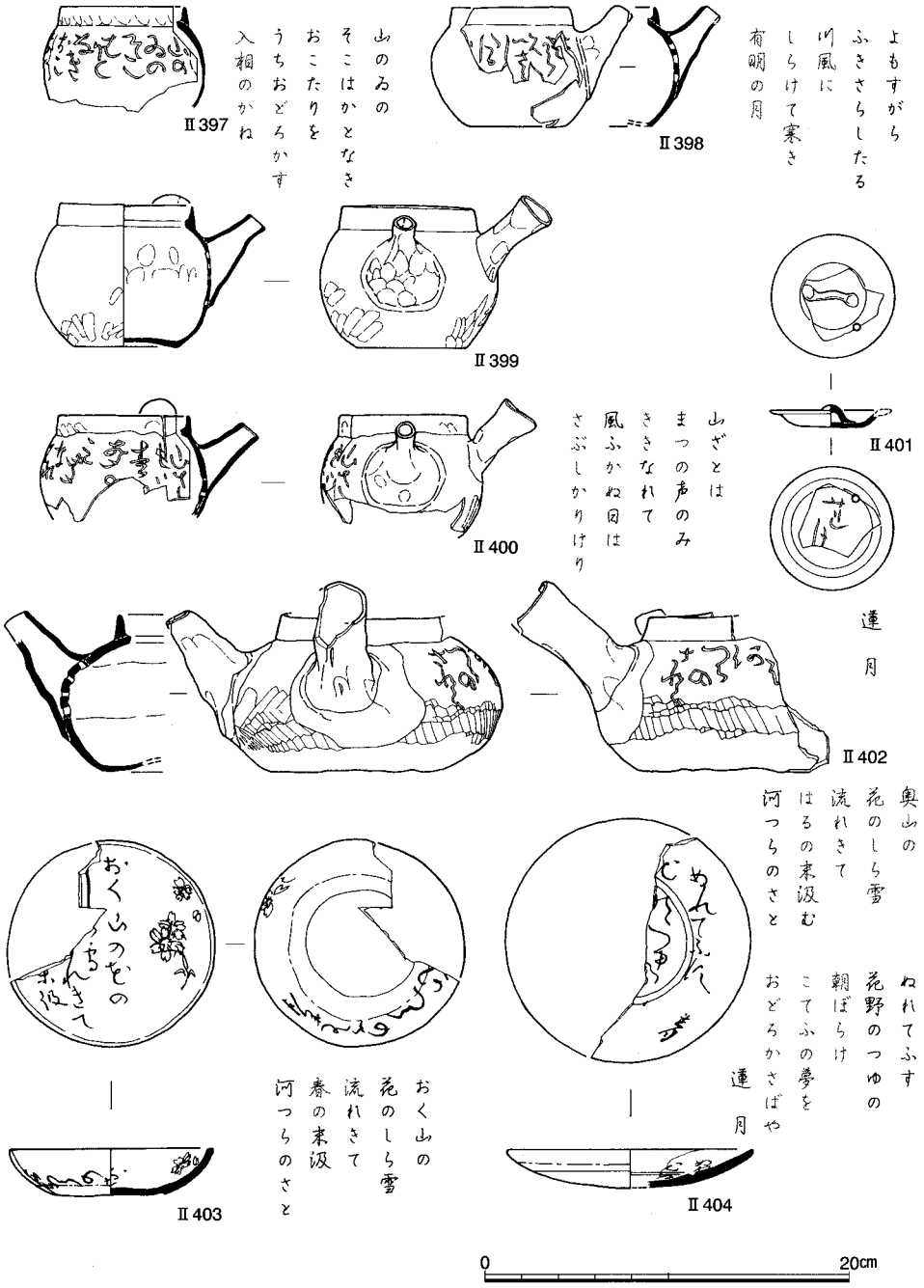


図62　蓮月焼(1)（Ⅱ397～Ⅱ400急須，Ⅱ401急須蓋，Ⅱ402湯瓶，Ⅱ403・Ⅱ404皿）

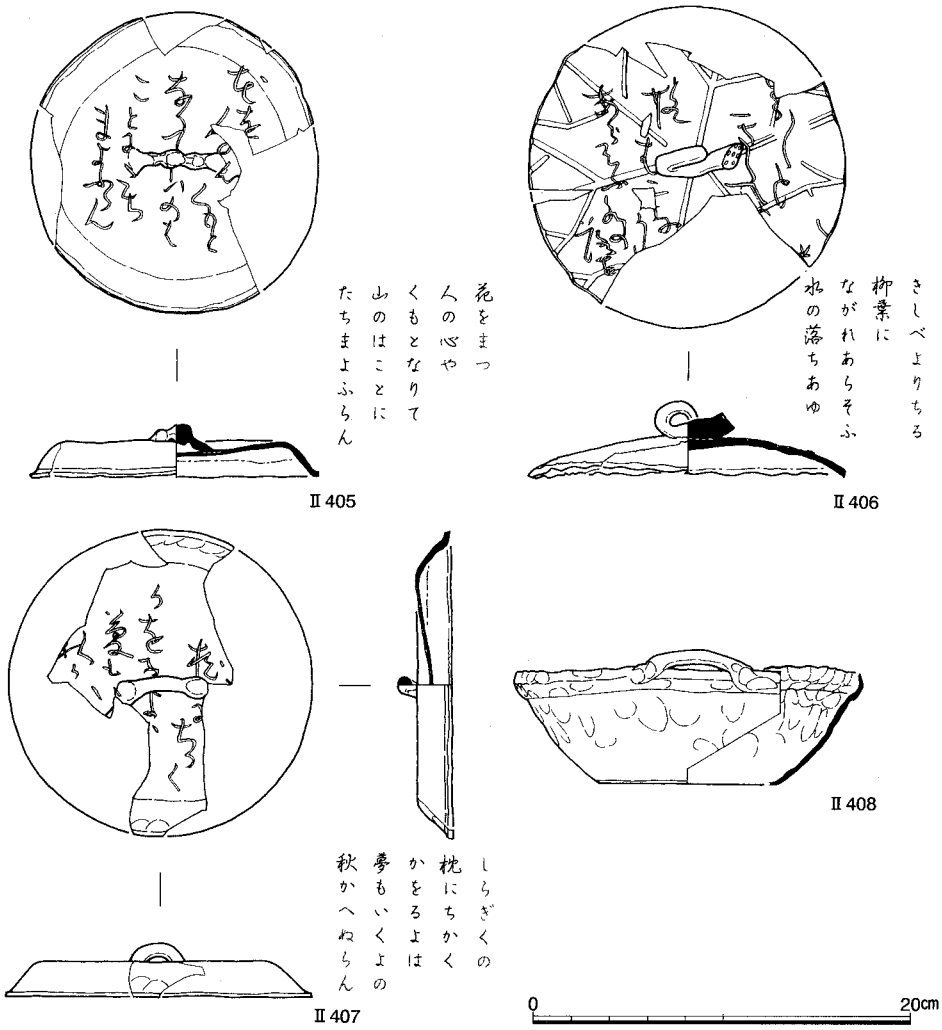


図63　蓮月焼(2)（Ⅱ405～Ⅱ408蓋物）

なお，蓮月焼最大の特徴である和歌全文が残存している資料は１点もみられなかった。そこで，書き込まれた歌を復元するために，現在に伝えられている蓮月の和歌979首をもとにデータベースを作成し，出土資料から判読できる歌の一部と一致する配列をもつものを検索して和歌の復原をおこなった。濃度を落としている箇所が推定部分である。

出土した資料は，煎茶における茶席の道具が主体を占めている。Ⅱ397～Ⅱ400は急須，Ⅱ401はその蓋である。Ⅱ397・Ⅱ398・Ⅱ400は，焼き締めによる焼成で，釘彫りで歌を刻む。Ⅱ400は外面全体に自然釉がかかる。Ⅱ399・Ⅱ401は灰白色を呈し，焼きがあまい。

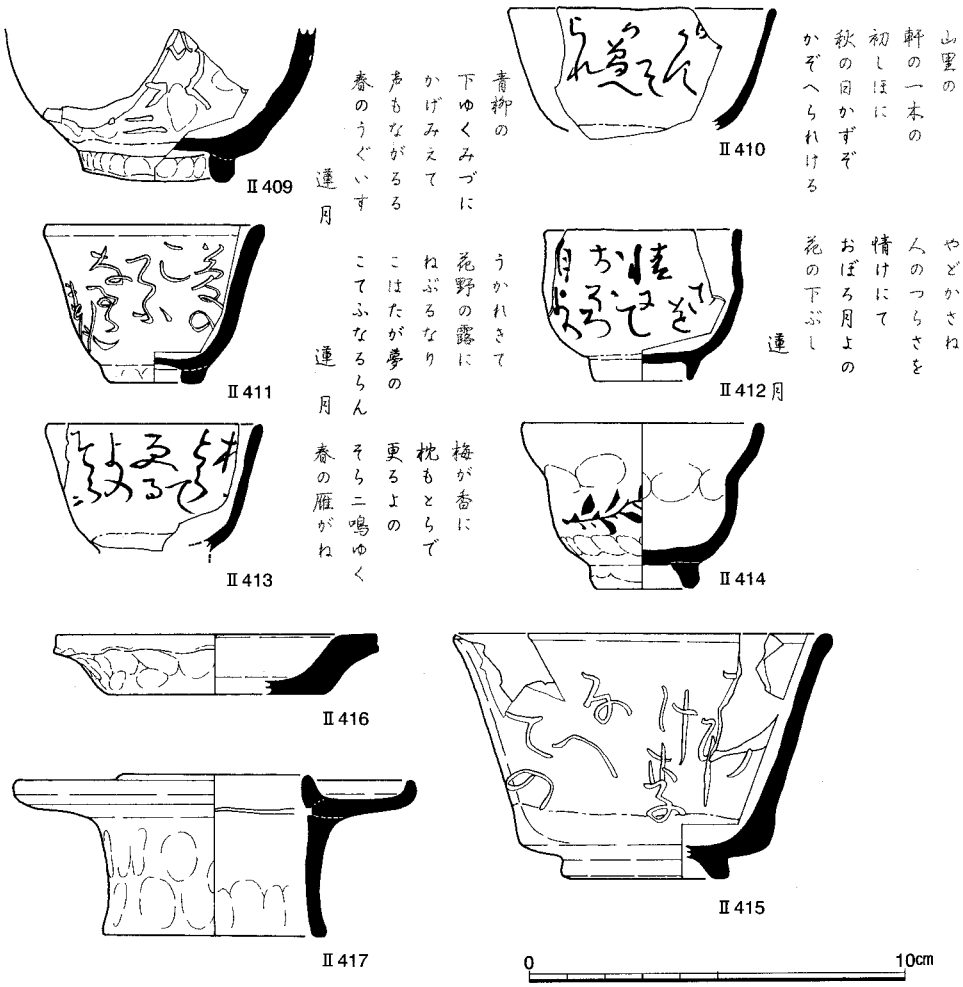


図64　蓮月焼(3)（Ⅱ409～Ⅱ414椀，Ⅱ415鉢，Ⅱ416・Ⅱ417茶托）　縮尺1/2

Ⅱ401は，裏面に「蓮月」の銘を釘彫りする。Ⅱ399は和歌を筆書きし，施釉して仕上げるための素焼きの段階の可能性もある。

Ⅱ402は焼き締めによる湯瓶で，釘彫りで歌を刻む。急須・湯瓶に刻まれた和歌は，注ぎ口の向かって左側からはじまり，把手の向かって右側で収まるように配列されている。これは客席に対する正面を意識した結果であろう。

Ⅱ403・Ⅱ404は皿。Ⅱ403は，筆書きで桜花の図と賛をつける。和歌は見込みから始まって体部外面でおわり，「蓮月」の銘をもつ。底部外面を除いて施釉する。Ⅱ404は，見込みに圏線がめぐり，同時代の土師器皿の形態を模倣している。筆書きによる和歌を見込み

に配し，口縁部外面から見込みにかけて施釉する。

Ⅱ405～Ⅱ408は蓋物の類で，Ⅱ405～Ⅱ407は蓋，Ⅱ408は身である。Ⅱ408は２箇所に橋状把手のつく鉢で，内外面に指押さえによる整形の痕跡が顕著に残る。淡橙色を呈し，焼きがあまいことから，施釉するための素焼きの可能性もある。Ⅱ405～Ⅱ407は上面に釘彫りで和歌を刻み，内面にⅡ405・Ⅱ407は透明釉，Ⅱ406は白色の釉を施す。Ⅱ406は蓮の葉と地下茎をかたどっている。

Ⅱ409～Ⅱ414は椀。口径５～７㎝，器高４～4.5㎝のⅡ410～Ⅱ414は煎茶椀である。Ⅱ411のみ無釉で，それ以外は底部外面を除いて施釉する。Ⅱ409は，釘彫りで和歌と「蓮月」の銘を刻んでいる。Ⅱ410・Ⅱ412・Ⅱ413は筆書きで和歌をしるす。Ⅱ414も筆書きで草文を描く。口縁部から体部は，12分の１程度しか残存していないので，この資料にも和歌を詠んだ可能性が残る。Ⅱ411は釘彫りで和歌と「蓮月」の銘を刻む。灰白色から灰色を呈し，焼きがあまいため，施釉のための素焼きかもしれない。

Ⅱ415は，上面観が方形になる鉢で，底部外面を除いて施釉する。この例のみ，和歌を判読できなかった。蓮月焼ではないかもしれない。Ⅱ416・Ⅱ417は茶托であろう。いずれも無釉で，Ⅱ416は淡橙色，Ⅱ417は灰白色を呈し焼きがあまいので，施釉前の素焼きの可能性が高い。Ⅱ416は底面は磨いて平滑な面としている。

Ⅱ418～Ⅱ421は，蓋（Ⅱ418・Ⅱ419）と身（Ⅱ420・Ⅱ421）がセットをなす焼き締めの香合。蓋は亀をかたどっている。身の底部には，釘彫りで「蓮月」の銘を刻む。蓋，身ともに側縁を３～４箇所刻んでいる。紐かけの工夫であろうか。蓮月尼65歳ごろの作とされる伝世品に酷似する〔京都府立総合資料館編84，p.8〕。

Ⅱ422は焼き締めによる壺形の容器。外面には部分的に自然釉がかかる。釘彫りによる歌をもつ。口径8.5㎝前後，胴部最大径12.8㎝，器高10.6㎝をはかる。Ⅱ425も同様の形状の胴下半から底部の資料。無釉で釘彫りによる歌をもつ。淡橙色を呈し焼成はあまい。茶席の道具であるとすれば，水指あるいは建水などに使用されるものであろうか。

Ⅱ423は涼炉。円筒形の胴部とさなの部分は，別々に製作して接合している。口縁部内面には瓶掛けが３箇所つき，胴部下半に長方形の窓があいて舌状の灰出しがとりつく。素焼きで淡橙色を呈する。釘彫りで，和歌と「蓮月」の銘を刻む。

Ⅱ424は口径23㎝前後，器高22.4㎝をはかる。三足になる脚のうち，１個を欠損する。脚部には小孔をもつ。底部を除く外面に淡青色の釉をかける。「蓮月」の銘をもつが，欠損により和歌は残存しない。内部に五徳を置いて用いた火炉と思われる。

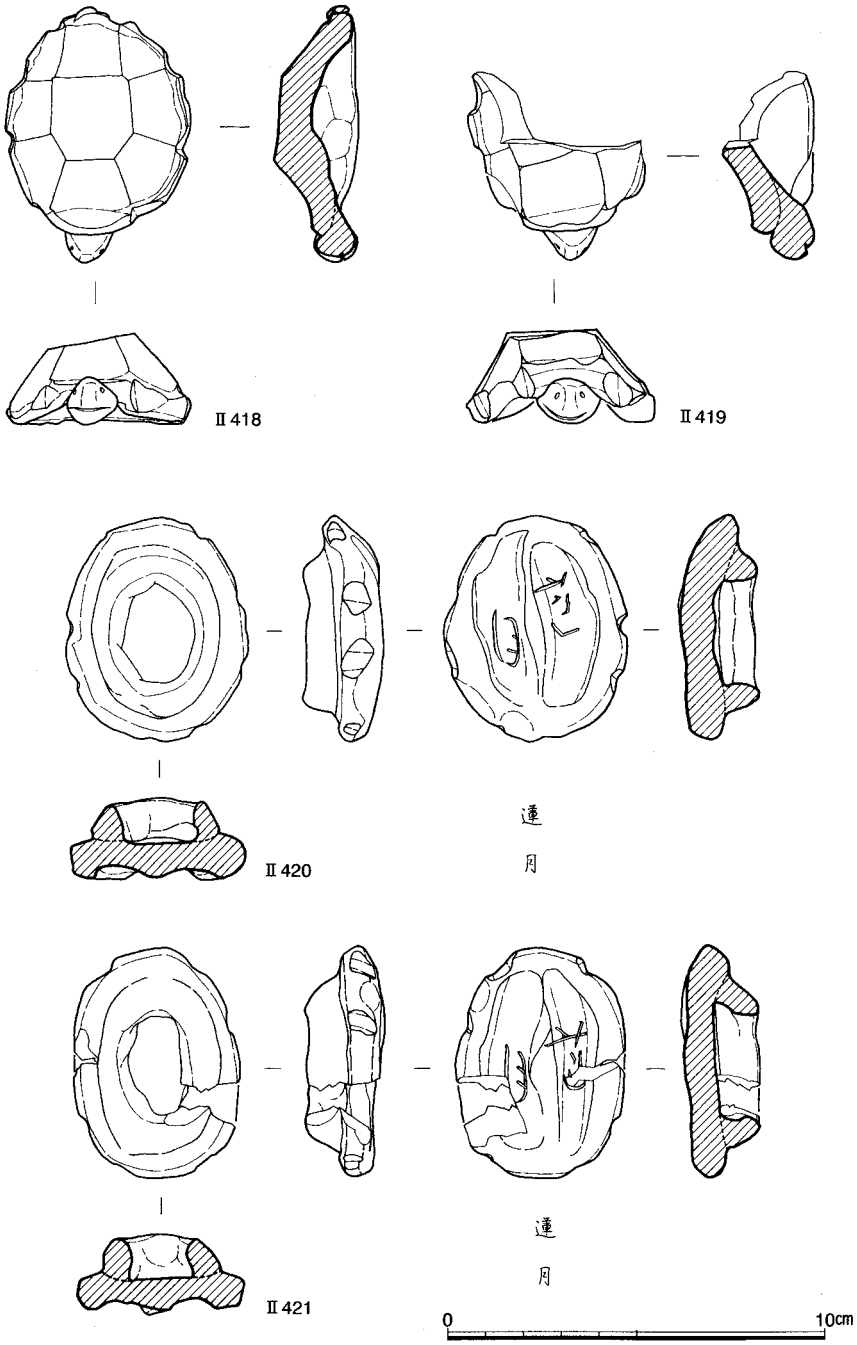


図65　蓮月焼(4)（Ⅱ418～Ⅱ421香合）　縮尺1/2

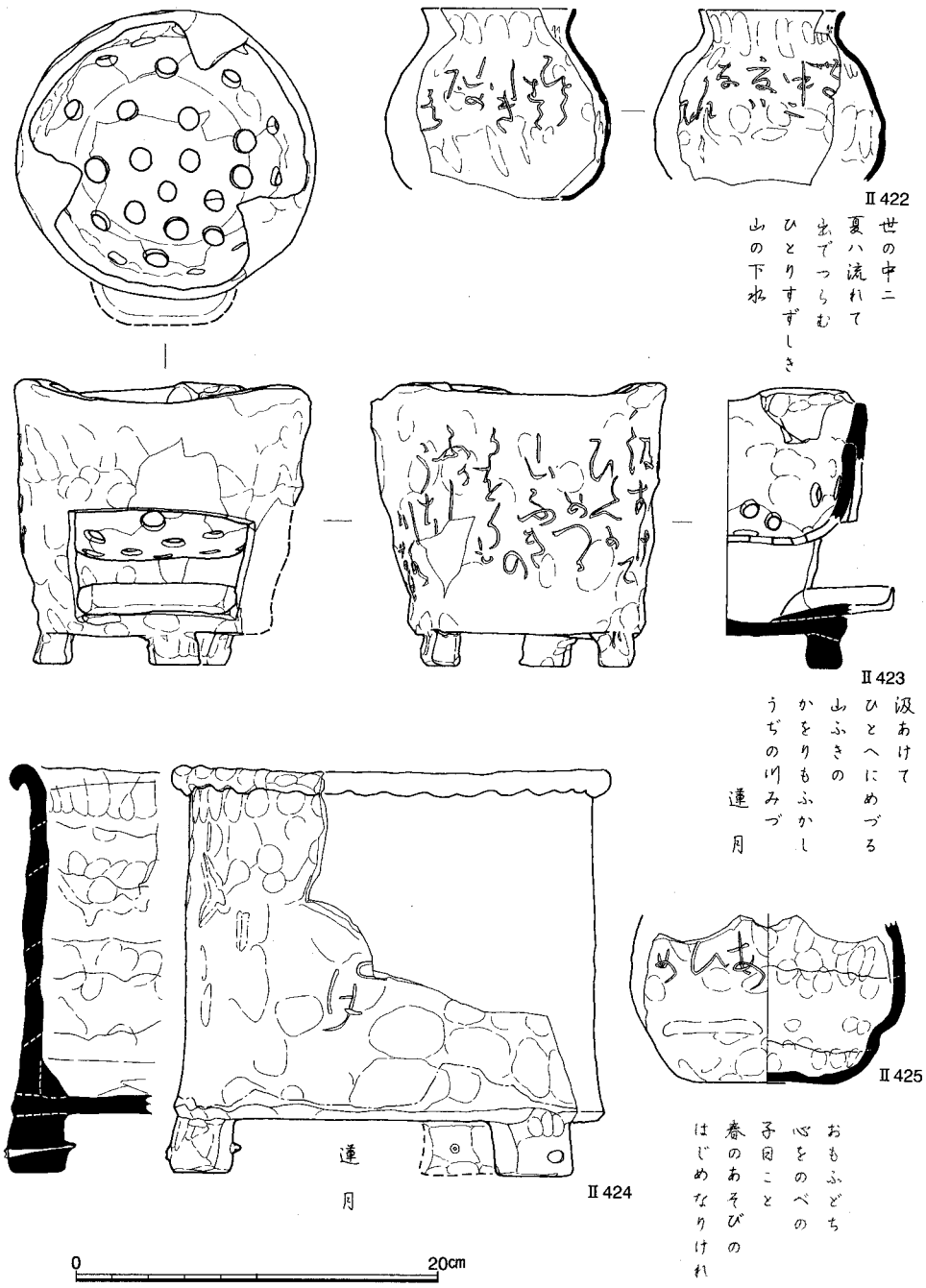


図66　蓮月焼(5)（Ⅱ422・Ⅱ425壺形，Ⅱ423涼炉，Ⅱ424火炉）

3　ＡＦ20区の遺構と遺物

(1) 層　　位（図67）

地表面の標高は，調査区東北端で48.7m，南西端で48.1mをはかり，南西に向かって緩やかに傾斜する。調査区の基本層位は，上から表土（第１層），暗灰褐色土（第２層），明褐色土（第３層），灰茶褐色土（第４層），淡褐色土（第５層），礫混じり灰褐色土（第６層），瓦混じり灰褐色土（第７層），青灰色粘土（第８層），灰褐色土（第９層），瓦混じり灰褐色粘質土（第10層），黄灰色シルト（第11層），赤褐色砂礫（第12層）である。

第２層と第３層は近代の造成土である。第４層から第10層までは江戸時代の堆積物で，18世紀の遺物を多量に含む。このうち第６～８層は流路ＳＲ１の埋土であり，底に堆積する第８層は自然堆積層，拳大から人頭大の礫や多量の瓦を含む第６層と第７層は人為的な堆積層である。また，ＳＲ１に切られる第10層は，Ｙ＝1997付近で土取穴を切って立ち上がっている。ＳＲ１以前の流路堆積物とみられるが，肩部を一部検出するにとどまった。

第11層および第12層は，前節ＡＧ20区の第８層，第９層にそれぞれ対応する堆積物である。黄灰色シルトは土取りの対象となった土層であり，本調査区ではほとんど残存していなかった。

(2) 遺　　構（図版23，図68）

中世の遺構　本調査区で検出した中世の遺構として，井戸ＳＥ１がある。後世の土取りによって上部は破壊されていたが，井戸側の最下部と水溜は比較的良好に残存していた。掘形は円形，井戸側は縦板を横桟で押える構造で，水溜に曲物を設置している。裏込めには，小児頭大の礫を充填していた。井戸底の標高45.8mをはかる。井戸底の埋土からD_2・D_4類の土師器皿が少量出土した。13世紀前葉ごろのものであろう。

調査区の東半を中心に黄灰色シルトを掘り込んだ不整形の土坑が多数検出された。シルトの下層に堆積している赤褐色砂礫に達すると掘削をやめていることから，シルトの採取を目的とした土取穴と理解できる。遺物がほとんど出土していないため，年代の特定は難しいが，中世前半（13世紀）のＳＥ１を破壊し，近世後半（18世紀）の遺構に切られていることから，中世後半～近世前半の時間幅にはおさまるだろう。

近世の遺構　池・溝・流路・杭列などを検出した。池ＳＧ１は，西に隣接するＡＦ19区で見つかっていたＳＧ１と一連のものであり，今回の調査によって，南北約16m，東西約15mの規模をもつ不整円形の池で，東北の隅にＳＧ１に流れ込む溝ＳＤ１がとりつくこ

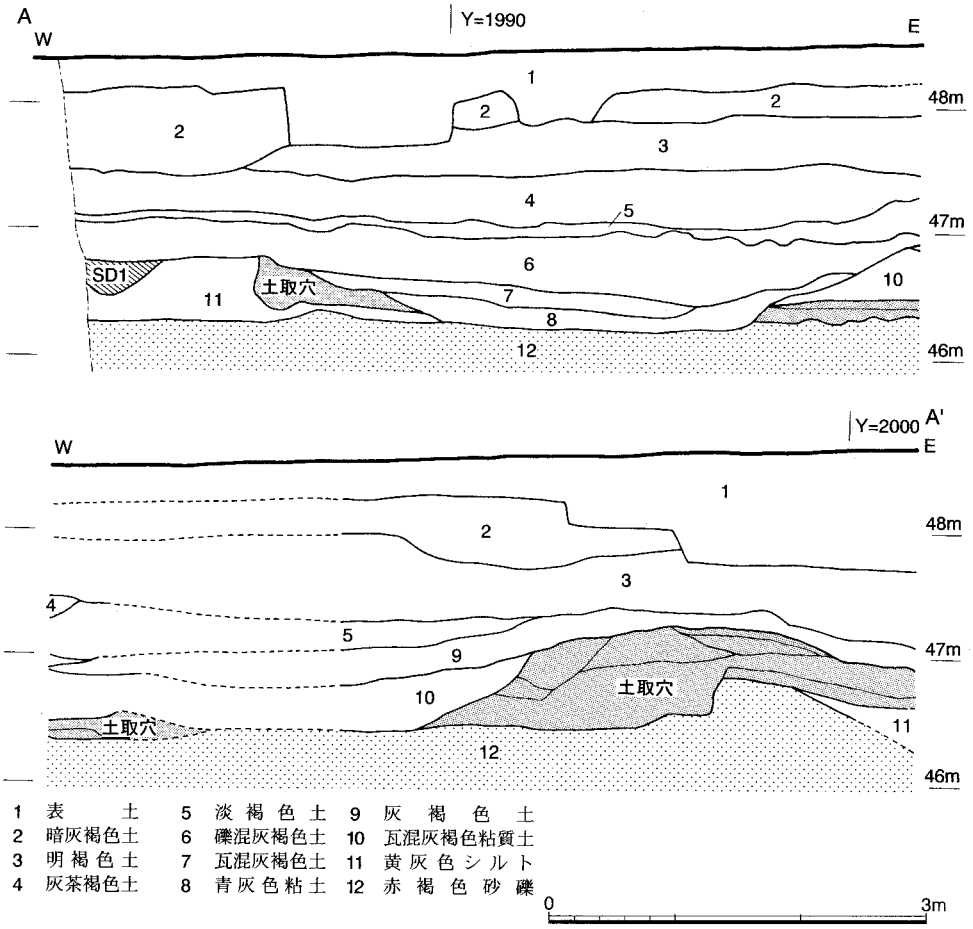


図67　ＡＦ20区の層位　縮尺1/60

とが判明した。ＡＦ19区では，護岸として厚さ１ｍにおよぶ石組みがみられたが，今回検出した東岸部分には，そうした施設はみられなかった。ただし，直径７㎝前後の杭が30㎝～50㎝の間隔で，４本打ち込まれている箇所があり（ＳＡ３），護岸にかかわる何らかの施設があった可能性はある。また，北端の取水口部分からは，口径５～６㎝の小型の土師器皿が完形でまとまって出土した。

溝ＳＤ１は，幅80㎝，検出面からの深さ30㎝前後をはかり，北端は調査区外へと続いてる。東に接する流路ＳＲ１との位置関係からみて，調査区の北方部分でＳＲ１にとりついていたと推定できる。ＳＲ１から取水し，ＳＧ１へと配水したのであろう。

ＳＲ１は北から南へ流れる流路で，幅約４ｍ，検出面からの深さ約60㎝をはかる。調査

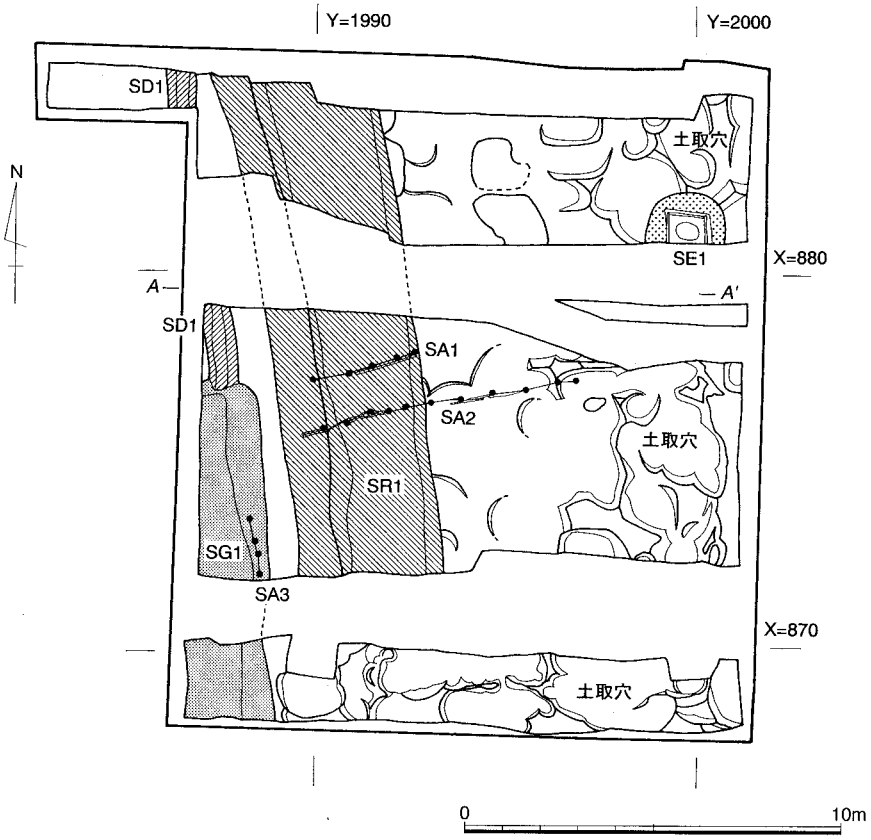


図68　ＡＦ20区検出の遺構　縮尺1/200

区南辺では，後世の攪乱のために検出できなかったが，南北ともに調査区外へと続いている。前述したように，多量の瓦礫によって埋積している。

杭列は３基検出した。ＳＡ１・２はＳＲ１を横断する形で設置されていた。ＳＡ１は，直径６㎝前後の杭５本からなり，ＳＲ１東側肩から西側の立ち上がりにかけて，40～80㎝の間隔で打ち込まれていた。ＳＡ２は，直径６～10㎝の杭11本からなり，ＳＲ１西側立ち上がりからＳＲ１の東側４ｍの地点まで，40～80㎝の間隔で打ち込まれていた。ＳＡ１には横木が置かれており，ＳＡ２には竹材を８字状に横に渡してあった。構造的にみて，ＳＡ１・２はしがらみ状を呈するが，1.2ｍ前後の間隔で併行していることから，簡単な構造の橋であった可能性もあろう。ＳＡ３は，前述のように，ＳＧ１の東岸に設けられており，護岸にかかわる施設であったと思われる。

(3) 遺　　物（図版35～37，図69～71）

ＳＧ１出土遺物　Ⅱ426～Ⅱ453は土師器皿。見込みに圏線をもつⅡ426～Ⅱ435と圏線をもたないⅡ436～Ⅱ453に大別できる。圏線をもつ皿は，Ⅱ428～Ⅱ435の口径10cm前後のものが主体を占め，Ⅱ427の口径12cm前後のもの，Ⅱ426の16cmをこえる大型のものがわずかにみられる。圏線の断面はレ字状を呈するものが多い。圏線をもたない皿は，Ⅱ436～Ⅱ443の口径８cm前後のものとⅡ444～Ⅱ453の口径５～６cmのものに分けられる。圏線をもつ皿と圏線をもたない口径８cm前後の皿には，口縁端部を中心に煤が付着するものが見られる。

Ⅱ454は土師器椀。回転台を用いて，外面は磨き，内面は横撫でによって整形されている。灰白色を呈し，底部外面は黒変している。Ⅱ455は，回転台整形の土師器皿。灰白色を呈する。見込みに型押しで，鶴・亀・松・竹・梅からなる蓬莱文様をもつ。和鏡の型を転用している可能性がある。Ⅱ456は土師器焙烙。口径28.2cm，器高6.3cmをはかる。底部を外型で成形しており，口頸部との接合の痕跡が外面に明瞭に残る。内面と口縁部外面を回転撫でで仕上げている。難波洋三による分類のＧ類である〔難波89b〕。

Ⅱ457は土師器で，胎土に雲母が目立つ。口径12.4cm，器高3.8cm。体部からいったん内側に屈曲した後，短い口縁部が外へ開く。底部は丸底となる。Ⅱ456と同様に底部は外型作りで，口頸部を接合した後，内面から口頸部にかけて回転撫でで仕上げている。底部外面が変色し，薄く煤が付着していることから，焙烙の一種とみてよいと思われる。

Ⅱ458・Ⅱ459は焼塩壺。口径３cm前後，器高は６cm前後である。口縁部が内傾してすぼまる形態で，口縁部内外面を，横撫でで仕上げている。渡辺誠による分類のＦ類である〔渡辺85〕。

Ⅱ460～Ⅱ471は陶器。Ⅱ460は灯明皿。見込みから口縁端部にかけて施釉する。口縁部内面に，ボタン状の貼り付けをもつ。Ⅱ461は仏飯。底面を除いて，灰緑色の釉をかける。Ⅱ462は口縁部が端反りになる瓶。櫛描きによる横線で器面を３分割し，上下方向の櫛描文を充填している。外面には自然釉がかかる。Ⅱ463は唐津系椀。外面は白泥，内面は白泥と鉄釉を刷毛塗りしている。Ⅱ464は半筒形の椀。口縁端部と底部外面を除いて，灰緑色の釉を施す。Ⅱ465は輪層形の椀。胎土は赤褐色を呈し，砂粒を多く含む。内面と口縁部外面に白泥を塗り透明釉を施し，草花文をあしらう。

Ⅱ466～Ⅱ469は京焼系の椀と鉢。Ⅱ466とⅡ467は半球形の椀で，Ⅱ466は鉄釉で文様を施す。Ⅱ467は色絵で，菖蒲文を描く。Ⅱ468とⅡ469は器高の低い丸形の鉢。見込みに色

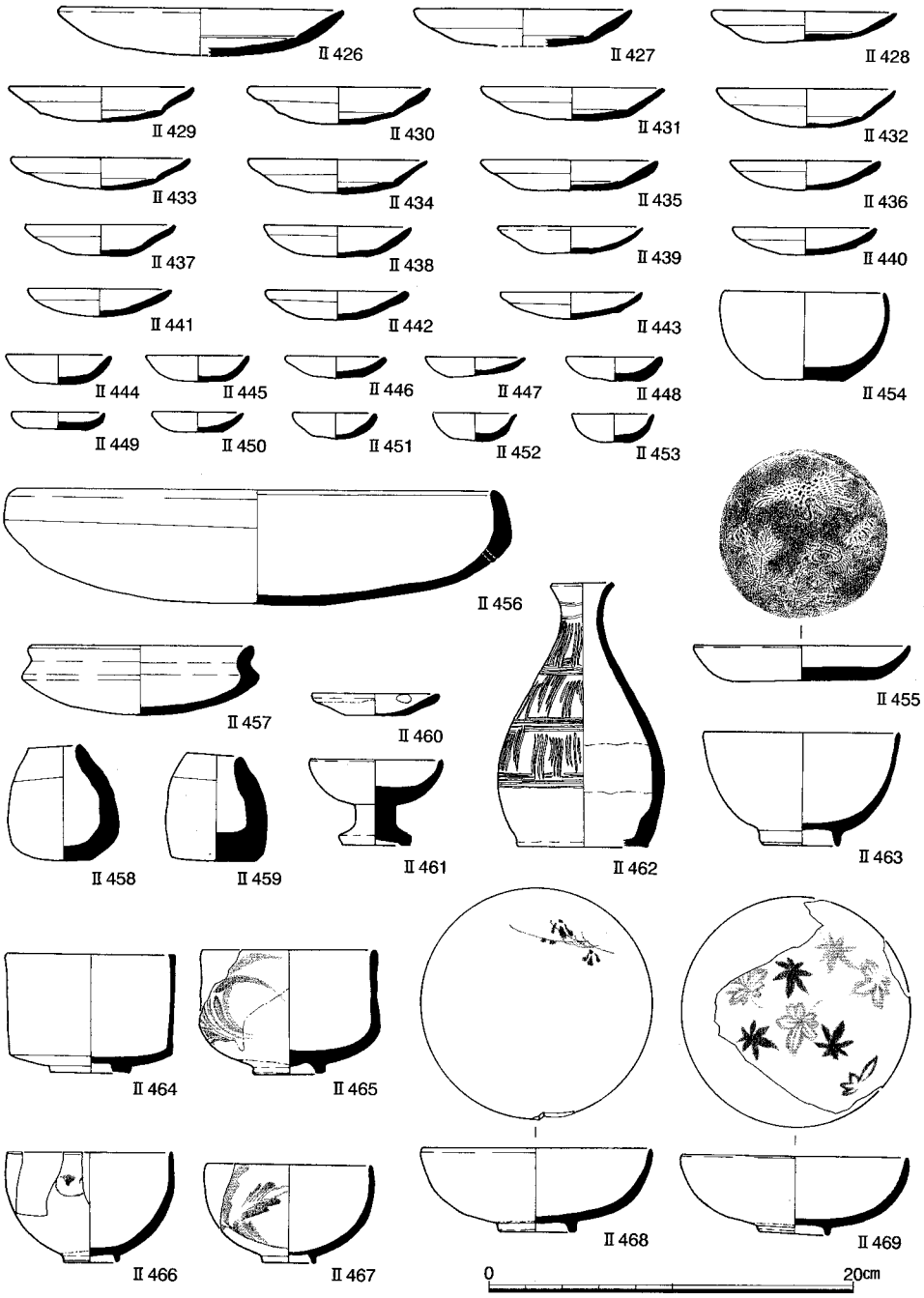


図69　ＳＧ１出土遺物(1)（Ⅱ426～Ⅱ459土師器，Ⅱ460～Ⅱ469陶器）

絵で文様を描く。Ⅱ470は片口。胎土は乳白色を呈し，底部外面を除いて灰釉を施す。Ⅱ471は鉄釉土鍋。口縁部の２箇所に紐状の把手があり，その一方には注ぎ口が口縁下にとりつく。底部には三足がつき，底部外面には煤が厚く付着する。

Ⅱ472～Ⅱ484は磁器染付。Ⅱ472～Ⅱ475は丸形椀，Ⅱ476は半筒形椀である。Ⅱ474は「太明成化年製」，Ⅱ475は二重方形枠内に「渦福」の底裏銘をもつ。Ⅱ477は半筒形の鉢。口縁部内面を無釉にする蓋物である。Ⅱ478～Ⅱ481は皿。Ⅱ479は口銹を施し，内面は墨弾きの技法で波文を描く。Ⅱ481は見込みにコンニャク判で龍文を描く。Ⅱ482・Ⅱ483は椀蓋，Ⅱ484は蓋物の蓋である。Ⅱ482はコンニャク判で文様を描く。Ⅱ483は見込みに五弁花文をもつ。

これらＳＧ１から出土した遺物は，18世紀中頃を中心とする時期のものであろう。

ＳＲ１出土遺物　Ⅱ485・Ⅱ486は土師器皿。口径9.5cm前後で，見込みに圏線をもつ。Ⅱ487・Ⅱ488は焼塩壺。Ⅱ487は，筒形で口縁端部に蓋受けの段をもつが，痕跡的である。胴部を板作りし，底部に粘土塊を充填している。刻印はみられない。器高8.1cm，最大径6.8cm。Ⅱ488は筒形で，回転台を用いた撫で仕上げ。刻印はみられない。器高6.4cm，最大径7.1cm。Ⅱ487はＣ類，Ⅱ488はＪ類に比定できよう〔渡辺85〕。Ⅱ489は広口の陶器壺。胎土は黄白色を呈し，外面に鉄泥を施す。

Ⅱ490～Ⅱ492は磁器染付。Ⅱ490・Ⅱ491は椀。Ⅱ490は外面を暦字文で飾り，見込みにくずした「壽」の文字をもつ。Ⅱ491は半筒形の椀で，口縁部内面に四方襷文を描いている。Ⅱ492は皿。見込みに五弁花，「渦福」の底裏銘をもつ。

ＳＲ１から出土した土師器皿は，ＳＧ１と比較して，法量がわずかに小さく後出的である。染付の年代観ともあわせると，このＳＲ１出土遺物は，18世紀後葉のものが中心と理解する。

坩　　堝　本調査区東北隅の第９層から集中的に出土し，ＳＧ１からも少量出土した坩堝について，代表的なものの実測図を掲げて解説を加えておきたい。底部で個体識別をすると，20個体前後の出土点数となる。法量や注口の有無で，大きく２つに分類することができる。

Ａ類（Ⅱ493・Ⅱ495）は，筒形で高さが30cmをこえ，注口のつくもの。「梅干壺」と呼ばれる大型の坩堝である〔葉賀90〕。上面観は楕円形で，上方にゆくに従って偏平の度合いが強くなる。注口部は，中央やや上よりの位置につき，注口の反対側の外面は，径３～４cm，深さ２cm前後凹んでいる。

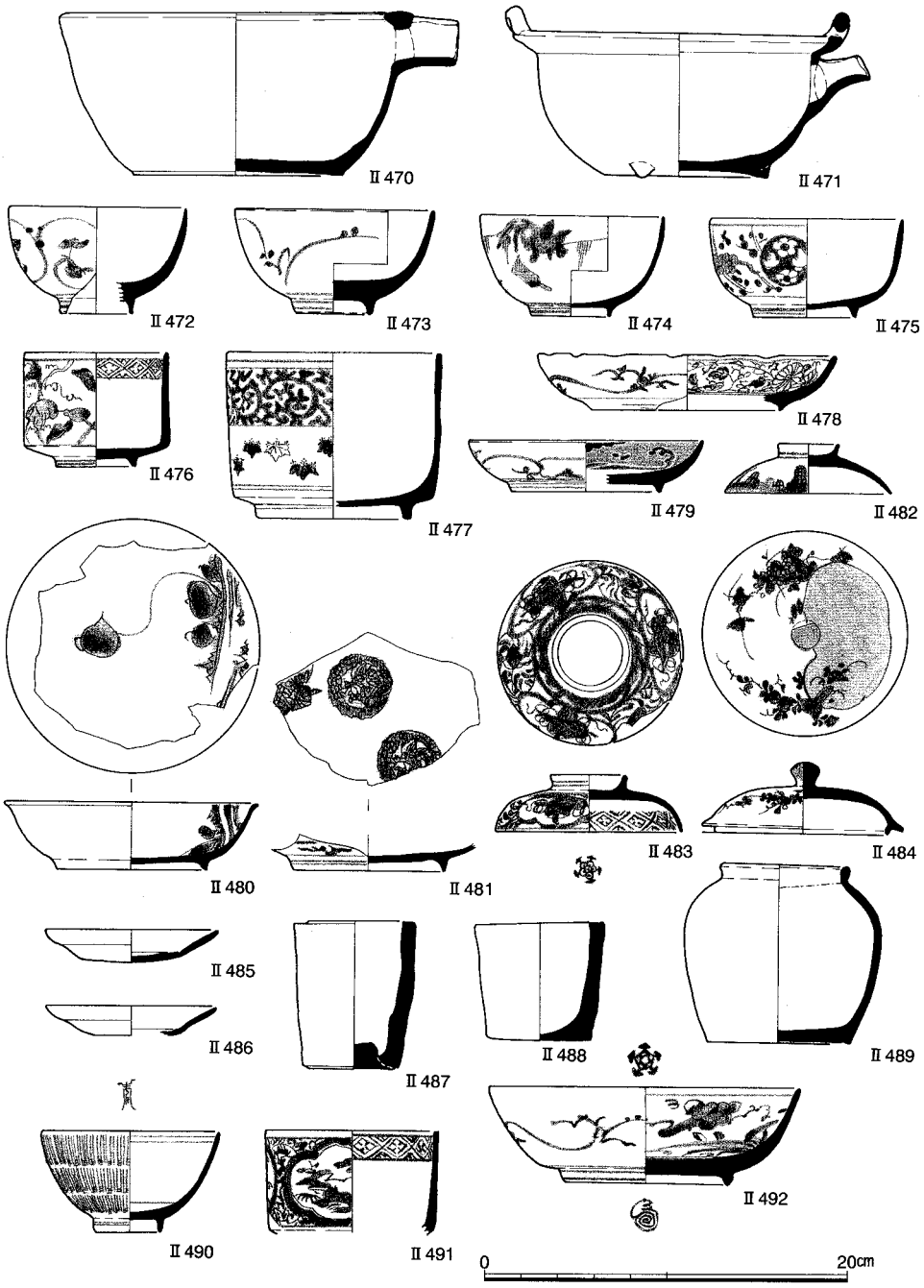


図70　ＳＧ１出土遺物(2)（Ⅱ470・Ⅱ471陶器，Ⅱ472～Ⅱ484染付）

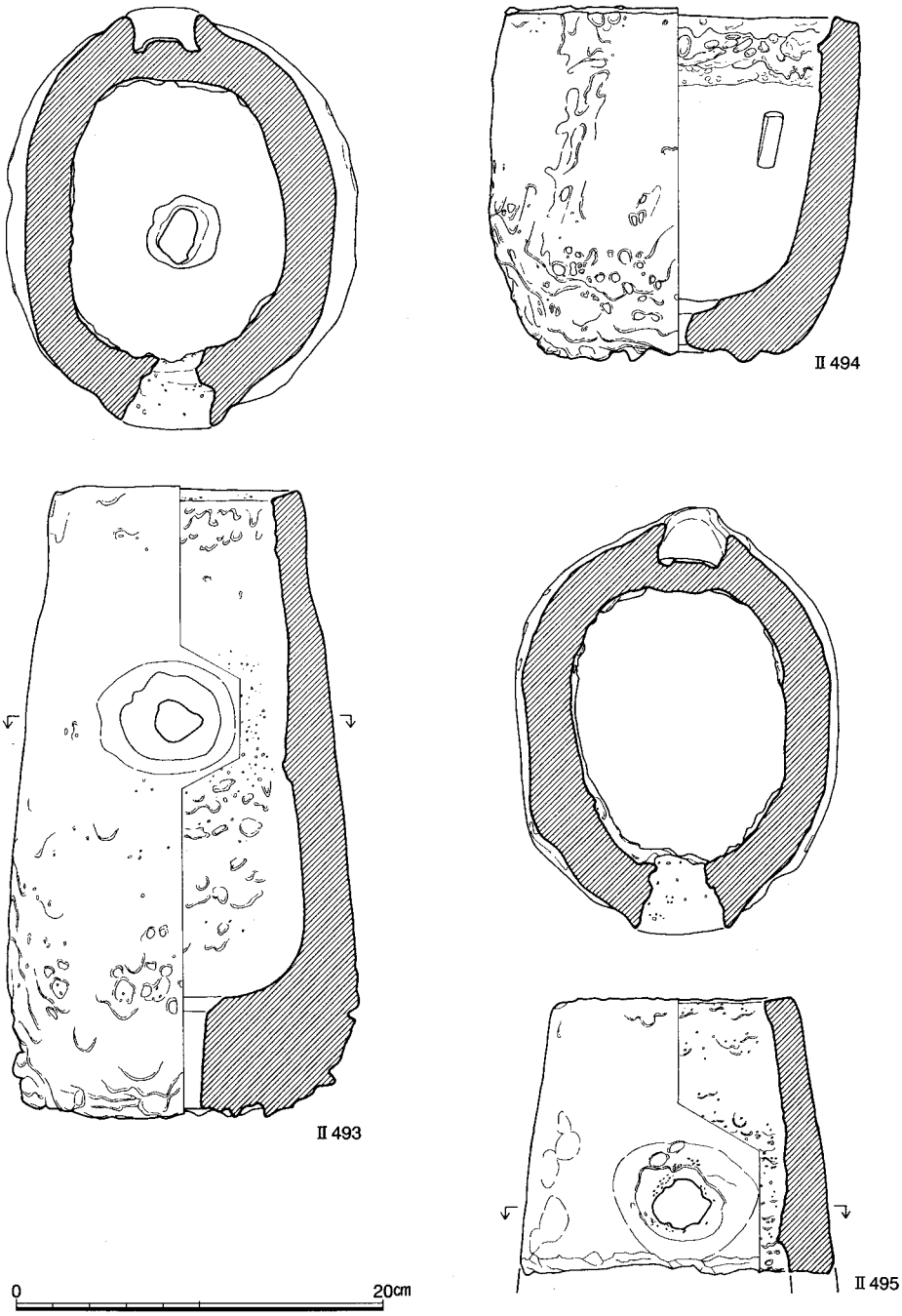


図71　坩　堝（Ⅱ493・Ⅱ494灰褐色土出土，Ⅱ495ＳＧ１出土）

江戸時代の銅精錬の案内書である『鼓銅図録』〔増田・丹羽1801〕には，職人が坩堝を「ユトリハシ」で鋏んで，溶銅を流し出している様子が描かれた図が見られる(図72)。外面にある凹みは，「ユトリハシ」を引っかけて固定するためのものと考えることができる。

図72　坩堝の使用状況
(『鼓銅図録』江戸科学古典叢書１より)

Ａ類の大部分は，Ⅱ495のように注口部直下の部分で切断されており，全形のわかる資料はⅡ493のみである。

Ｂ類（Ⅱ494）は，半筒形で高さ20㎝以下で注口をもたないもの。Ⅱ494の１例のみ。上面観は楕円形を呈し，口縁部内面に，長方形の凹みが２箇所みられる。この凹みも，「ユトリハシ」を引っかけるためのものかもしれない。

Ａ類，Ｂ類ともに内面から口縁端部にかけて溶融し，付着物がみられる。外面は二次的な熱のために，赤紫色や黒褐色に変色し，下半部を中心にガラス質化している。底面には木炭が噛んでいた痕跡が認められるので，据え置いて用いたのであろう。緑青が観察できる個体があることから，銅の精錬に用いた坩堝であることがわかる。また，底部には直径1.5～３㎝の穴があくが，断面は溶融しておらず二次的な穿孔である。

こうした大型の坩堝は，花生けとして華道の世界では珍重されてきたらしい〔葉賀90〕。今回発見された坩堝の底部には，すべて穴があけられており，またＡ類は注口直下で切断されたものがほとんどであった。また，注口直下で切断するために，外面に鏨で筋彫りを施した破片もＳＧ１から出土している。ＳＧ１からは，切断され不要になった上部のみ出土し底部の残る資料が出土しておらず，集中して発見された調査区東北隅からは，逆に切断された上部や切断途上の資料は出土していない。

こうした出土状況を勘案すると，これらは植木鉢として転用するために，調査区付近で切断，穿孔がなされた後，不要な上半部はＳＧ１へ捨てられ，下半部が調査区東北隅に集められた後，遺棄されたものであると考える。ＳＧ１出土遺物の年代から判断して，18世紀中頃のものであろう。

4　小　　結

病院構内でおこなわれた既往の調査成果にも目を配りつつ，今回の発掘調査の成果をまとめて，結びとしたい。

先史時代の遺跡と遺物　従来の調査成果から，病院構内一帯は現在の鴨川東縁部にあたり，先史時代には，高野川系や白川系の河川が北から南へ流れる低地部を形成していたことが明らかになっている。今回の調査でも，ＡＧ20区東調査区で縄文・弥生時代の旧流路（ＳＲ２～７）がみつかった。また調査区一帯の基盤は，高野川系とみられる赤褐色砂礫からなり，ＡＧ20区東調査区とＡＦ20区では，この砂礫の上に黄灰色シルトが堆積していたが，ＡＧ20区西調査区にはみられなかった。シルト層は，医学部構内から病院構内東辺に分布し，土取りの対象となった堆積物であり，高野川系流路がつくった凹地が滞水域となって形成されたものと考えられている〔清水91〕。

旧流路やその溢流堆積物からは，縄文後期，弥生前～後期の土器が総計約400点出土した。大半は小破片で流路内から出土しているので，遺物の存在がただちにこの地での活動の痕跡を示すとは言えないものの，全体的に摩滅の少ないものが多いので，遠方からの流れ込みとは考えにくい。とくに縄文後期の土器はまとまっており，溢流堆積から出土しているⅡ１～Ⅱ４のように，器形が復原できる良好な資料も得ている。

病院構内の複数の調査地点から縄文土器が出土すること，本調査区の北に隣接する191地点で白川系流路の肩部に遺棄された縄文後期土器がみつかったこと，本調査区の東200ｍにある聖護院遺跡では，後期土器・石器など遺物とともに土坑がみつかっていることなどから，白川扇状地の西南端にあたる聖護院付近を中心に後期前葉の集落が営まれ，病院構内にあたる低地部でも，自然堤防や微高地上には縄文人の活動が及んでいたと想定してきた〔千葉91〕。今回の出土状況も，それを補強する成果といえる。

縄文後期土器の大半は，北白川上層式２期に比定できる。このうち，文様構成と器形が復原しうるⅡ１とⅡ４は，型式学的に重要な資料となろう。Ⅱ１は，口縁部に刻目隆帯が横走し，胴部上半に三角形文を描いており，関東地方の堀之内２式の文様に類似する。胴部が屈曲する器形も，堀之内２式前半に特徴的なものであり，系統論的には「関東系」と理解できる。ボウル形の浅鉢であるⅡ４は，上下２段の文様構成で，上段は三角文とＪ字文，下段は長方形区画文とＪ字渦巻文からなる。単純な器形の浅鉢で，文様構成が２段になる例はきわめて珍しい。上段の三角形文は，Ⅱ１の文様意匠に類似するものの，三角形

の底辺にこぶりなJ字文がつくのは，東の文様構成ではないだろう。下段の長方形区画文，渦巻文とともに，近畿以西の文様構成ではないかと想定している。滋賀県小川原遺跡や島根県佐太講武貝塚などにみられる三角形とJ字文の構図をもつ土器は，文様・器形ともに，九州地方の鐘崎式との関係を想起させる〔中村編95 図版63，赤澤98 図4〕。今は結論を急ぐことは差し控えるが，東西の型式をひろく参照・比較しつつ，文様の系統について，詳細な検討を加えることを今後の課題としておきたい。

古代・中世の土地利用　病院構内一帯では，現在のところ古墳時代の遺跡は発見されておらず，奈良時代から平安時代中期までの遺構も，154地点の7世紀後半8世紀初頭の土坑〔五十川ほか89〕，191地点の8世紀末の竪穴住居の可能性のある土坑，10世紀の土坑〔浜崎ほか93〕，155地点の10世紀ごろの井戸や土坑〔五十川ほか89〕，39地点の平安中期の護岸〔京大埋文研81a〕が見つかっている程度であり，活動の痕跡は希薄である。今回の調査では，この時期の遺構はみつかっていない。平安中期に高野川系流路に対して築かれた護岸が示すように，病院構内の西半は依然として高野川の氾濫原に含まれており，東半も後背低地として不安定な土地柄であったことが，この時期の開発が活発でないことの大きな理由であろう。

さて，病院構内も含めてこの地周辺の開発が本格的に開始されるのは，平安時代後期，法勝寺の建立（1077年）に始まる六勝寺の造営以降のことである。六勝寺の造営とともに，白河南殿・北殿といった院の御所や公家の邸宅，諸寺院の建立が相次ぎ，現在の左京区岡崎から吉田にかけて，「京白河」と洛中と並び称される白河街区が展開した〔浜崎91〕。こうした街区の整備にともなって，病院構内でも人々が本格的な活動を始めていることは，12世紀以降の遺構や遺物が病院構内一帯で急激に増加するという既往の調査結果から明らかである〔京大埋文研81a，浜崎84，五十川ほか89，浜崎ほか93〕。

白河街区の条坊地割については，いくつかの復原案があるが〔岡田79，浜崎91など〕，調査区付近は東西を今朱雀と仏所小路，南北を中御門大路末と勘解由小路末に画された場所で，白河北殿の北東隣接地にあたるようである。今回の調査でみつかった中世の遺構には井戸や土器溜，土坑，溝などがあり，それらは出土遺物の年代からみて，12世紀後葉～13世紀前葉，14世紀後半，15世紀後半の3期に分けることができる。調査区のかなりの部分が旧病棟基礎などによって破壊されており，井戸のように地中深く設けられた遺構が破壊をかろうじて免れて検出されているという状況を考慮する必要はあるけれども，12世紀前半，14世紀前半，15世紀前半，16世紀の遺構はなく，これらの時期の遺物もほとんど出

土していない。存続期間が比較的短く，連続しない３時期の遺構群として理解できるのが本調査区検出の遺構群の特色であろう。また，瓦がほとんど出土していないこと，いずれの時期も井戸を中心とした遺構のありようから判断して，邸宅や寺社の中心部からは，はずれた地点であると理解する。

このような遺構群のうち，12世紀後葉～13世紀前葉は，白河街区の展開と関連づけておきたい。北に隣接する154・155・191地点で検出されたこうした時期の遺構群は，仁平元（1151）年創建の福勝院との関連で理解されている〔五十川ほか89，浜崎ほか93〕。ただし，これらは勘解由小路末の北側に展開する遺構群であり，本調査区に残された該期の遺構群が福勝院に直接関連する可能性は少ないと考えている。白河北殿の北隣接地にあたる39地点では，この時期が遺構の形成のもっとも活発な時期となっており，それは院政を支えた勢力の拡大として解釈されている〔京大埋文研81a〕。白河北殿の北東隣接地にあたる本調査区の遺構群もこうした動向のなかで理解できるだろう。

14世紀後半，15世紀後半の遺構群の性格についてはどのようにみるべきであろうか。14世紀は院政を支えた旧勢力にかわって，吉田社や聖護院といった新興勢力によって鴨東白川の地が再編されてゆく時代である。聖護院の鎮守社である熊野社は，14世紀後半には，その四至を崇徳院と大吉祥院敷地とを除く「近衛以南，大炊御門以北，今辻子以西，至于河原」とされており〔福山77〕，この頃，伸長著しかった吉田社と近衛大路を境に社領を接していた。調査区一帯は，熊野社の社領に含まれることになる。中世後半の遺構は，熊野社との関連をひとまず想定しておき，周辺地域の調査の進展を待って再検討したい。

近世の土地利用　病院構内では，15世紀中頃を境に遺物量が急激に減少し，16世紀から17世紀にかけての遺構・遺物は，ほとんど皆無に等しい状況となる。ひろく京都大学吉田キャンパス一帯をみても同様の傾向にあり，この地一帯が貴族の邸宅や寺社地から耕作地へと変転していった状況を示すものとみられる。

こうした土地利用の変遷と対比したとき，17世紀の遺物を大量に含んで埋積している大溝（ＳＤ４～６）がＡＧ20区東調査区で検出されたことは注目に値しよう。南北に併行してはしるＳＤ４とＳＤ５は，北に隣接する191地点で検出されていたＳＤ22・23と一連の大溝である（図42）。今回の調査によって，ＳＤ４は70m以上の長さをもつこと，ＳＤ５は南北が50m前後で，南端で東に折れることが判明した。東に折れたＳＤ５は，15mほど伸びて立ち上がっている。ＳＤ４から派生して東へ伸びるＳＤ６もほぼ同じ地点で切れており，ここに出入り口を想定することもできる。なお，ＳＤ４の南端は調査区外へと続い

ているが，ＡＦ20区では検出されなかった。ここまでは大溝が伸びていないと想定できるが，調査区の位置関係から，ＡＦ20区の東側をはしる可能性もあるので，周辺地区の調査結果を待って判断したい。

191地点でこれらの溝を検出したさいには，18世紀後半の遺物を大量に含んでいたことから，18世紀代と判断した。そして，現在は東大路を隔てて東の聖護院西町に所在する照臨院という浄土宗律院が明治30年以前はＡＧ20区東調査区付近にあり，京都帝国大学附属病院の開設にともない現在地に移転していること，その開基が享保５（1720）年であることから，これらの大溝が照臨院に関連する可能性を考えた〔浜崎ほか93〕。

今回検出した部分では，18世紀代の遺物は少なく17世紀の遺物が中心となって埋積していた。とくにＳＤ４の北半は，17世紀前半の遺物を多量に含んでいた。これらの溝は，ある時期にいっきに埋まったとみるよりも，溝としての機能を失なったのち，廃棄場などとして利用されながら，17～18世紀という長い期間をかけて埋まっていったと理解するのが自然であるように思われる。溝の掘削の時期を特定することは難しいが，17世紀前半の遺物を含んで埋積しているので，それ以前ではあるだろう。16世紀代の遺物は，溝中はもとより，調査区全体からもほとんど出土していないので，16世紀に遡るとは考えにくく，17世紀の早い段階と考えているが，検討課題としておきたい。

このように考えると，これらの溝を照臨院と直接関係させるのは，年代的に無理が生じる。照臨院の開基は上述したように18世紀前葉のことであり，この段階では溝は機能を失なっているからである。照臨院は，僧霊潭が荒廃していた今日庵なる寺院に移り住んで1720年に再興させたという由緒をもっている〔碓井編15〕。今日庵の実態については不明であるが，これらの溝は照臨院の前身である今日庵に関連すると考え，寺院や邸宅を囲繞する溝と想定しておく。

また，東調査区の南東部では，近世の多数の井戸がみつかっている。これらは，18世紀前半までの遺物で埋まっているもの（ＳＥ３・７～９）と19世紀の遺物を含んでいるもの（ＳＥ２・５・６）にわけることができる。前者は今日庵，後者は照臨院に関連する井戸と考えることが可能であろう。

一方，ＡＦ20区では，18世紀に埋め立てられた池や流路が検出され，18～19世紀の大量の遺物がみつかっている。池は，西に隣接する141地点で検出した池の東端の部分にあたるものである〔浜崎・宮本87〕。陸地測量部によって明治20（1887）年に作成された仮製二万分一地形図を見ると，熊野社の北方は春日上通の北側，今回の調査区を含む病院構内

東南部あたりまで，聖護院村の集落が近代初頭には展開していたことがわかる。上述した照臨院以外に，現在，小路をはさんで照臨院の北に所在する梅瑞庵という曹洞寺院，現在は退転している有門院という天台寺院も，明治30年京都大学の敷地になるにあたって，東側の地に移転している〔碓井編15〕。近世後半から大学が病院敷地として買収する明治30年まで，調査区付近は聖護院村の町並みの北のはずれにあたり，寺院や住宅が散在する景観を呈していたのであろう。

蓮　月　焼　大田垣蓮月は，寛政３（1791）年に生まれ，明治８（1875）年85歳で没した幕末の歌人である。幼名を誠（のぶ）といい，33歳で出家して尼となり蓮月という法名を授けられた。生活の糧とするために，自詠の和歌を釘彫りした手づくねの茶器を製作したところ，当時，文人墨客のあいだに流行していた煎茶趣味に一致し，蓮月焼として名声を博した〔杉本76，徳田ほか82，京都府立総合資料館編84〕。

この蓮月焼が，京都大学構内では141地点の調査で出土して注目されたが〔浜崎・宮本87〕，今回の調査でもＡＧ20区東調査区の南辺で多量に出土した。141地点では急須・湯瓶・徳利・鉢がみられた。今回は急須・湯瓶・煎茶椀・皿・蓋物・鉢・茶托・香合・壺形・涼炉・火炉がみられ，施釉陶器，焼き締め陶器があるなど，多種多彩である。これらはすべて，焼き損ない品とみてよいものであった。蓮月は，粟田や清水の窯元に依頼して焼成をおこなっているので，焼き上がった作品をすべて持ち帰って選別をおこなったのであろう。そして，選に漏れた失敗作が調査区付近に廃棄されたものと考える。

蓮月が聖護院村の北辺，現在の病院構内東南あたりに居住したのは安政～文久年間で，蓮月60歳代の後半から70歳代前半のことのようである。Ⅱ418～Ⅱ421の香合は，安政２（1855）年，蓮月65歳ごろの作品として伝わる亀香合に酷似し，これには富岡鉄斎による，聖護院村で製作したという箱書がある〔京都府立総合資料館編84 p.8〕。

蓮月が陶器作りを始めるのは40歳代のことである。以来，85歳で没する直前まで作陶しており，多数の作品が後世に伝わっている。今回の出土資料は，焼き損ない品ではあるものの，聖護院村居住時代に限定できる一括資料であり，作風の変遷などを明らかにするうえで，重要な資料になるものと理解する。

なお，中・近世の遺物については難波洋三氏（京都国立博物館），梅川光隆氏，蓮月焼については，守屋雅史氏（大阪市立美術館），徳田光圓氏（西賀茂神光院），坩堝に関しては，内田俊秀氏（京都造形芸術大学），五十川伸矢氏（京都橘女子大学）から，有益なご教示をいただきました。末尾ながら，感謝申し上げます。